

S X2236**1. 遺構(Fig. 271)**

B-2区、C120Qで検出された土器棺墓で、VI層を基盤層としている。検出面の標高は7.2mである。S D2206の西肩付近に位置している。この土器棺墓はS X2235と同様、送電線の鉄塔基礎部分に残された擾乱坑の間隙に遺存していた。しかし、墓壙の東西はそれぞれ大きく擾乱坑に切られてしまい、遺構の状況はさらに不良であった。その上、調査中に遭遇した降雨等によって擾乱坑が崩落すると共に墓壙が崩壊し、詳細な記録作成は不可能となってしまった。推定復原される墓壙の法量は92cm × 139cm以上で、不整椭円形を呈するを考えられる。また深さは54cmで、壁面は鉢鉢状に掘削されている。墓壙内における土器棺の位置関係は全く不明である。埋土から棺身と思われる壺(1645)が出土したが、棺蓋などの存在は明らかにできなかった。IV様式。

2. 遺物(Fig. 272, PL.119)

1645は棺身と考えられる壺である。頸部より以上はほぼ水平に打ち欠かれているが、それ以下の部分では完全に遺存し、穿孔などはみられない。平底で倒卵形の体部をもち、最大径は体部の上半にある。頸部には部分的に刻目が観察され、外面下半に縦方向のケズリがある。

S X2237**1. 遺構(Fig. 273, PL.37)**

B-2区、C12R Yで検出された土器棺墓で、VI層を基盤層としており、平面の輪郭は比較的明瞭に検出された。検出面の標高は7.5mである。墓壙は径42cm前後の不整円形を呈し、深さは35cmである。壁面は上半がほぼ垂直、下半が半球状に掘削されている。土器棺は壺(1647)を棺身、鉢(1646)を棺蓋として合わせ口に組み、墓壙中央部分で棺身を約42°傾けた斜方向に設置されていた。棺身の主軸方向はN-23°-Wである。土器棺は墓壙の底に接して置かれ、また墓壙自体もほとんど削平されていないようだ。土器はほぼ完全に遺存していた。棺身は人為的に口縁部が打ち欠かれているが、棺蓋は完存していた。この両者を合わせ口として壺の上に鉢を逆転して被せ、鉢の口縁部が壺上半の体部に添うように組み合わされていた。いずれもV様式後半。

2. 遺物(Fig. 274, PL.119)

1646は棺蓋に用いられた中形鉢で、人為的な穿孔や打ち欠きはみられない。突出した平底をもち、浅い体部から屈曲して外上方に短く延びる口縁部を備えた中形鉢である。体部の内外面はミガキAで調整されている。

1647は棺身に用いられた壺で、頸部以上がほぼ水平に打ち欠かれている。体部に穿孔などはみられない。

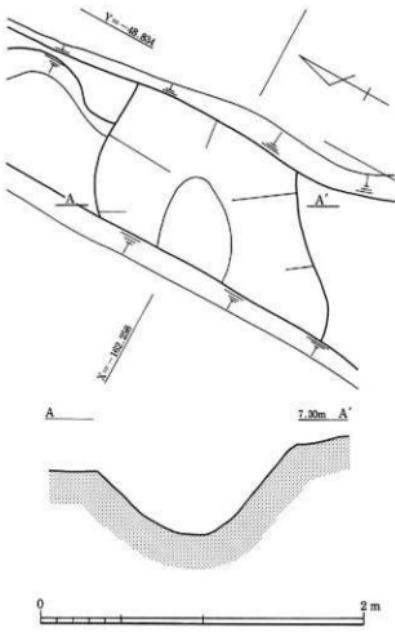


Fig. 271 S X2236平面図・断面図

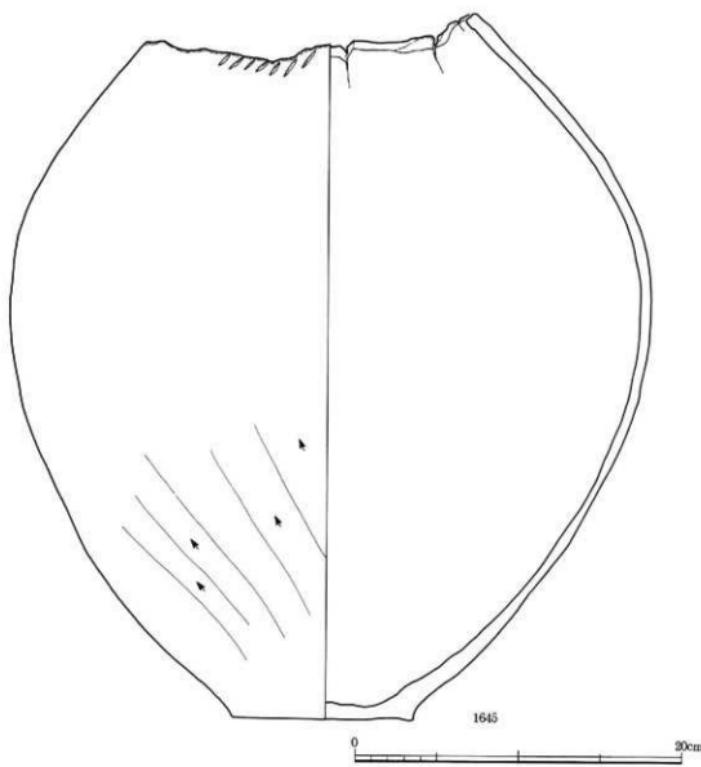


Fig. 272 S X2236出土遺物実測図

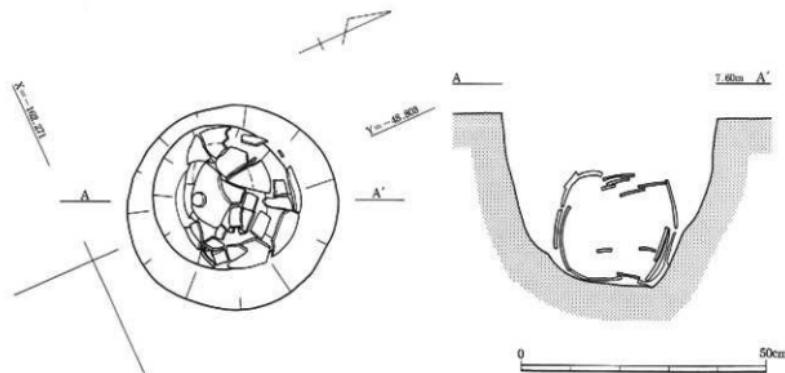


Fig. 273 S X2237平面図・断面図

い。突出した平底をもち、体部は無花果状で上半に最大径がある。体部外面は全面がミガキAで調整されている。内面はナデ仕上げである。

S E 2339

1. 遺構 (Fig. 275, PL. 38)

B-3区、C13Q Iで検出された素掘りの井戸で、VI層を基盤層としている。検出面の標高は7.2mである。調査区の境界に位置しているため北半部は調査区外に及び、南半部だけが検出された。直径2.3m前後の不整円形の井戸と推定され、深さは1.2mである。底は多少の凹凸を有するが径157cm前後の水平に近い面をもち、側壁面は垂直に近い急角度で立ち上がりをみせている。

遺物は井戸の最上層である黒褐色(10Y R3/1)粘土質微砂からまとめて出土した。この層位は中心部で厚さ40cmを測り、およそレンズ状に堆積している。土器は平面的にみれば、井戸の中央付近の分布密度が高いようである。またそれ以下の層位は成層堆積を示し、土器はほとんど出土しなかった。

2. 遺物 (Fig. 276・277, PL. 120)

出土土器の器種には甕(1648～1655)、壺(1656～1665)、高杯(1666・1667)、鉢(1668・1669)、婧壺(1670)、皮袋(1671)がある。

甕はいずれも弥生形甕Aで、右上がりもしくは水平タタキで成形されている。口縁部の作りには、端部をやや上方に抜張した1648・1653、端面をもつ1649・1650、口縁部外面に緩い稜線をもつ1655がある。1652は底部外面に縦方向のハケ、1655は体部外面の中央から下半にかけて横方向のハケがある。

壺は1656～1661が広口壺である。このうち1656は口縁端部をやや肥厚させたDで、他はAである。1662・1663は、口縁部が一旦立ち上がって外反する傾向をもつ壺Xである。1664はタタキ成形された球形の体部に、ほぼ直立する短い口縁部を備えた短頸壺である。

高杯はいずれも脚部のみで、脚柱部内面は中空である。

鉢1668は口縁部を欠いているが、小形鉢Bであろう。1669は平底に1孔を穿った有孔鉢である。

1670はナデ仕上げの婧壺で、底部は平底状の平坦面を有している。

1671は皮袋である。短く立ち上がった椭円形の口縁部をもち、体部の側面観はフラスコのように三角形に広がりつつ底辺に至るが、縦面観ではあまり厚さがない。

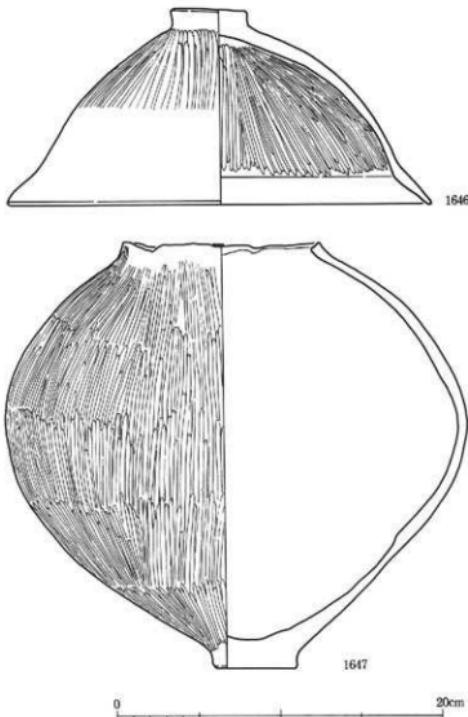


Fig. 274 S X 2237出土遺物実測図

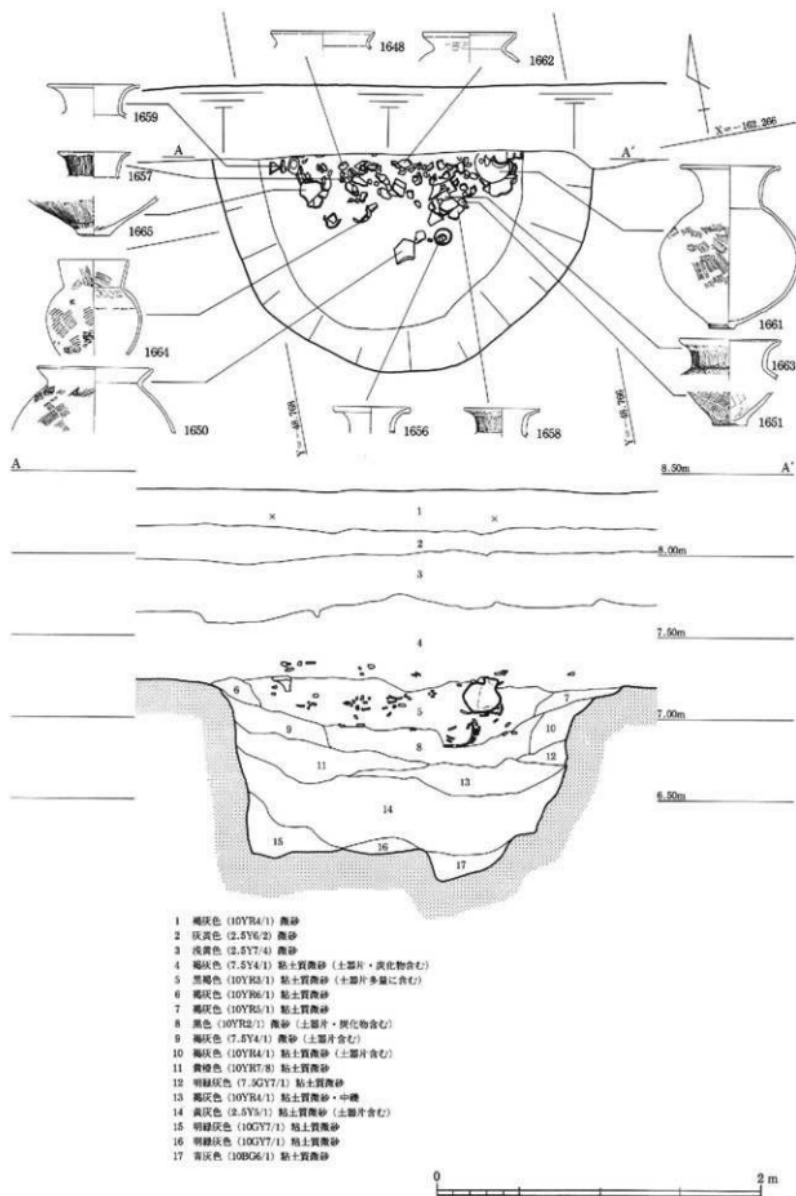
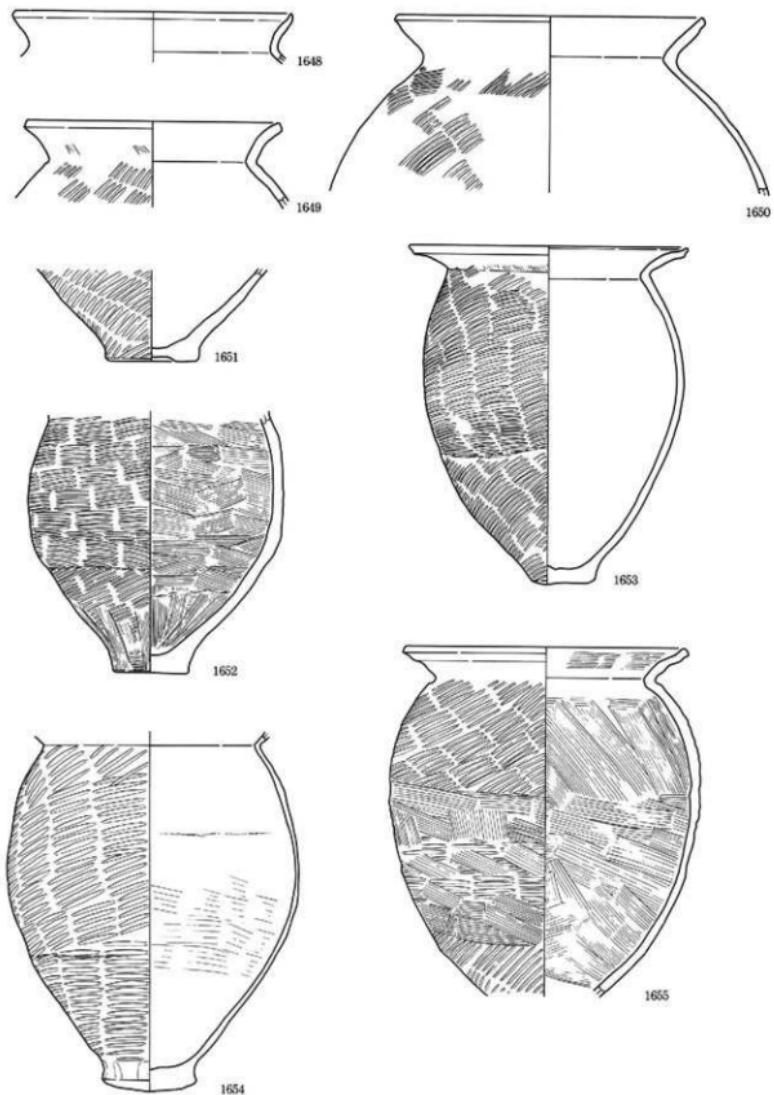


Fig. 275 S E 2339平面図・断面図



0 20cm

Fig. 276 S E 2339出土遺物実測図(1)

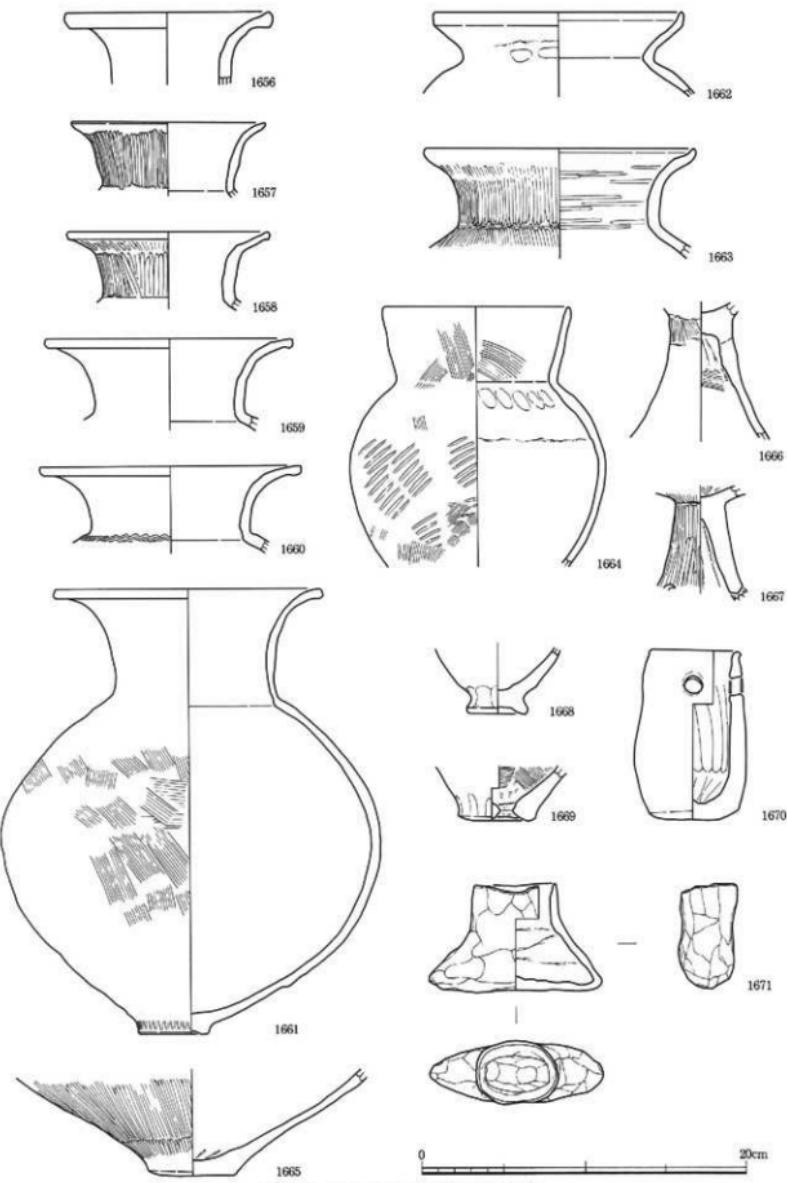


Fig. 277 S E 2339出土遺物実測図(2)

S E 1140

1. 遺構(Fig. 278, PL. 38)

A-1区、C12MH周辺で検出された素掘りの井戸である。N R1104の左岸の河畔に位置する。この井戸の周辺にはVI層は存在しておらず、N R1104の川岸に形成された弥生時代後期～古墳時代初頭の堆積層に検出面をもつ。検出面の標高は現状では7.25m前後であったが、遺物の出土状況から本来は7.3m以上と思われる。井戸の本体は長径0.5m、短径0.3mの橢円形を呈し、また検出面からの深さは0.7

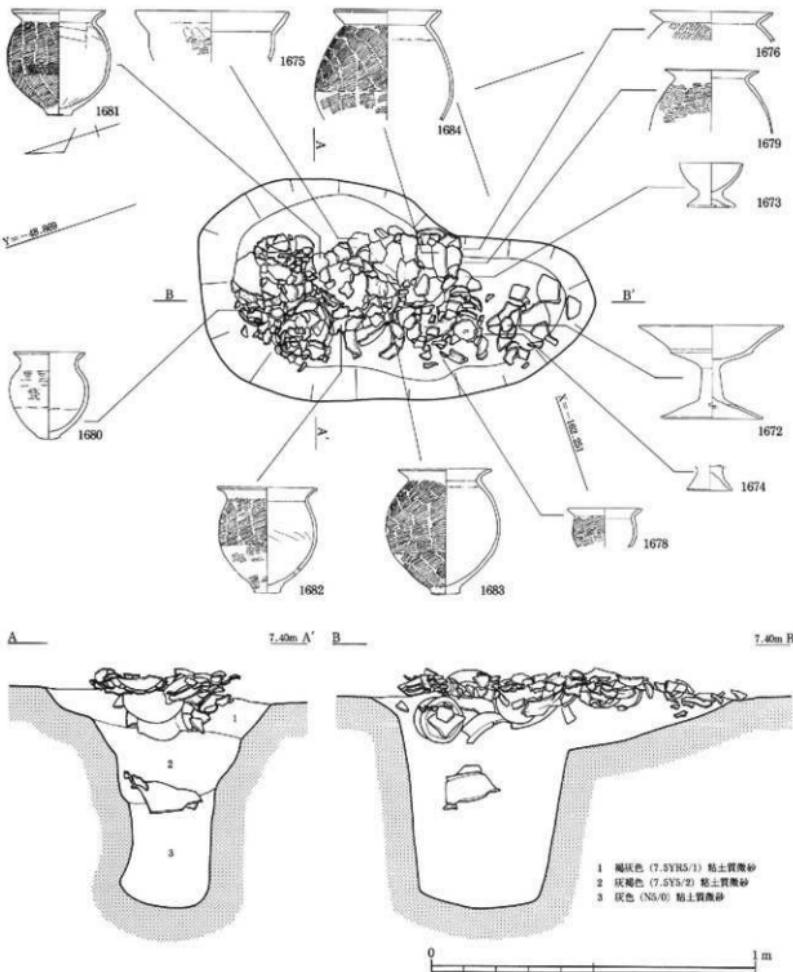


Fig. 278 S E 1140 平面図・断面見通図

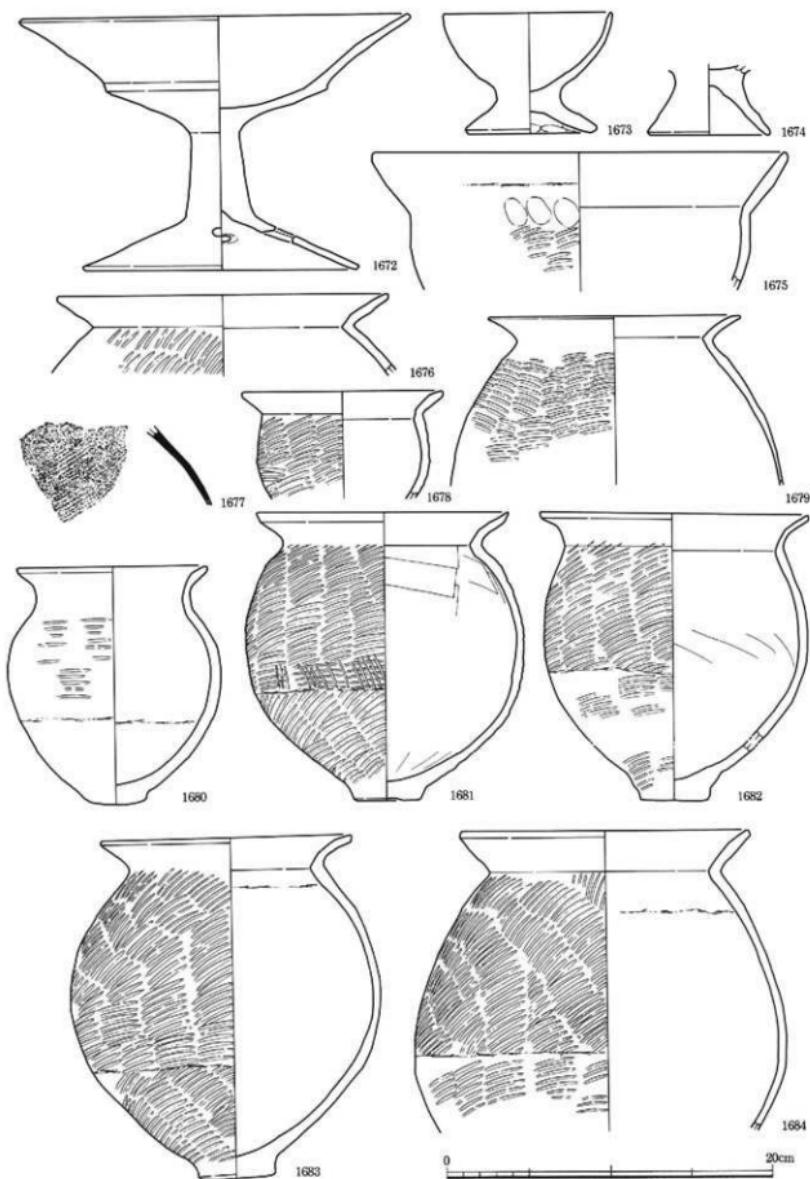


Fig. 279 S E 1140出土遺物実測図

mである。垂直に近い急角度で基盤となる堆積層が掘込まれ、ほぼ平坦な底に至っている。またその周囲には長軸1.2m、短軸0.7mの浅く不定形な落込みがある。埋土は3層に大別されるが、中層の最下部から甕の破片が検出された以外、全ての土器は最上層の褐色(7.5YR5/1)粘土質微砂から出土している。

2. 遺物(Fig. 279, PL. 121)

出土土器には高杯(1672), 鉢(1673~1675), 甕(1676~1684)がある。

1672は有棱高杯Aである。体部と口縁部の境界は明瞭に区画される。口縁部はやや外反しながら長く外上方に延びる。脚柱部と脚裾部はそれぞれ直線的で、境界は明瞭である。

鉢Xの1673は脚部がやや発達して大きい。1675は中形鉢であるが、片口の有無は不明である。体部外面にはタキ成形痕が残る。1674は器種不明の脚台である。

甕には弥生形甕(1676・1678~1684), 庄内式甕A(1677)がある。弥生形甕はいずれもタキ成形され、口縁端部は丸くおさめた1676・1678~1680、端部を僅かに上方に拡張する1681、端部に緩やかで不明瞭な端面をもつ1682~1684がある。小形の1678を除いて体部は大きく張り出し、球形に近い形態をとる個体が多いが、突出した平底を備えている。庄内式甕Aは肩部の細片で、外面に右上がりの細かいタキ成形痕が残されている。

S K 1143

1. 遺構(Fig. 280, PL. 39)

A-1区、C12D D周辺で検出された土坑である。形成時期不明の自然河川N R1303が埋没した後、その上に堆積した微砂層を基盤層としている。検出面の標高は5.9mである。調査区の端部に位置し、一部が側溝で損壊したがほぼ完存しており、長軸は2.3m前後、短軸は1mのやや細長い不定形な平面形を呈する。検出面からの深さは9.6mで、底面は細長い平坦面を成し、壁面は垂直に近い急角度で立ち上がる。土坑の下層、および中層から多量の弥生土器を検出した。また土器に混じって不定形な粘土

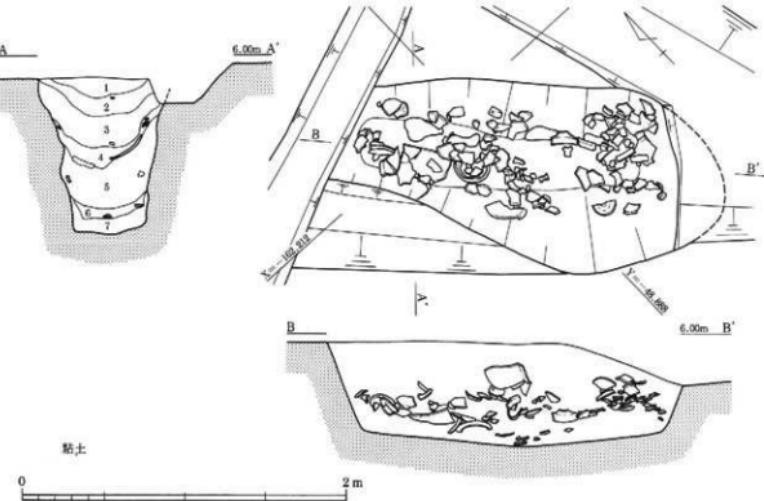


Fig. 280 S K 1143 平面図・断面見通図

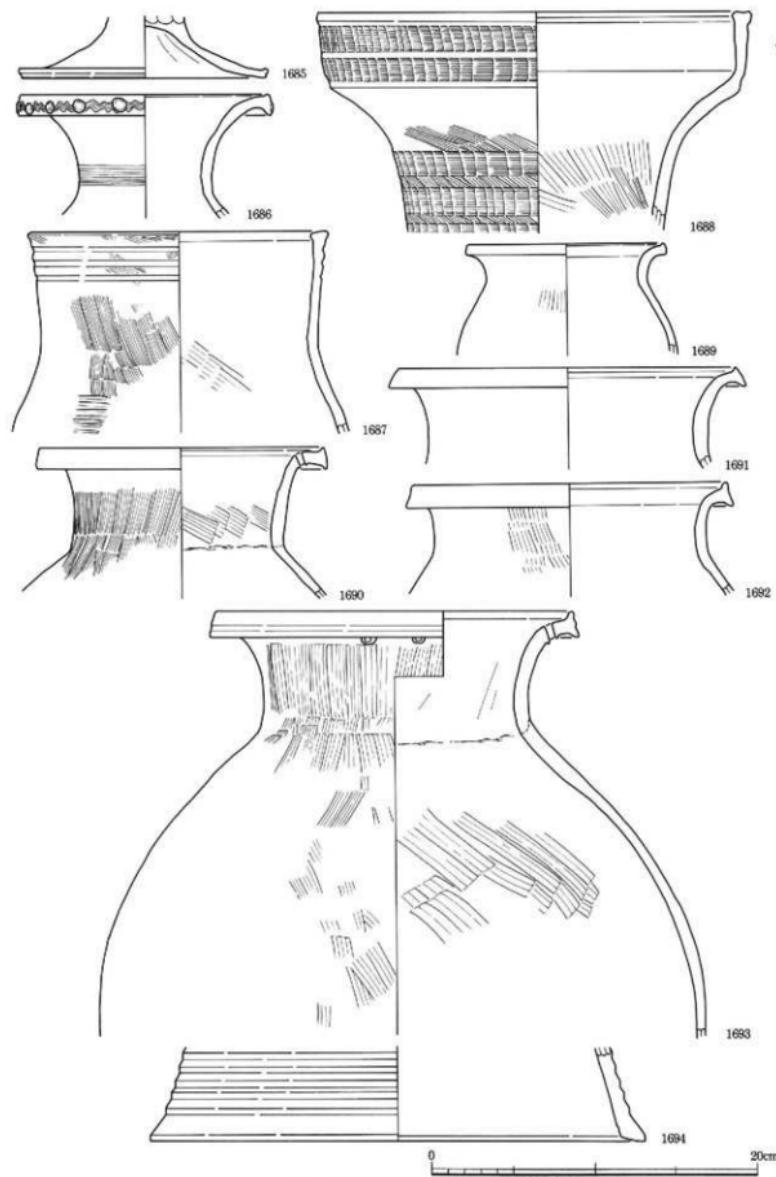


Fig. 281 SK 1143出土遺物実測図(1)

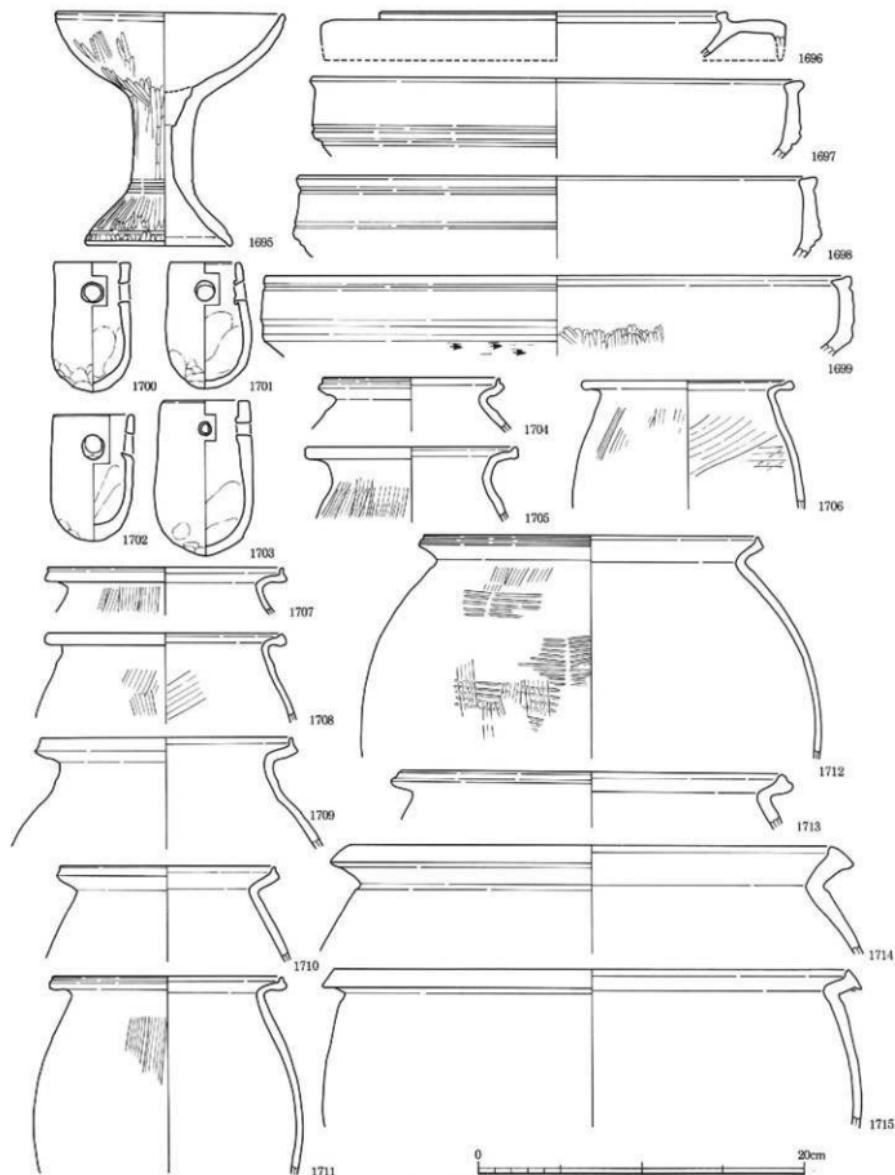


Fig. 282 SK 1143出土遺物実測図(2)

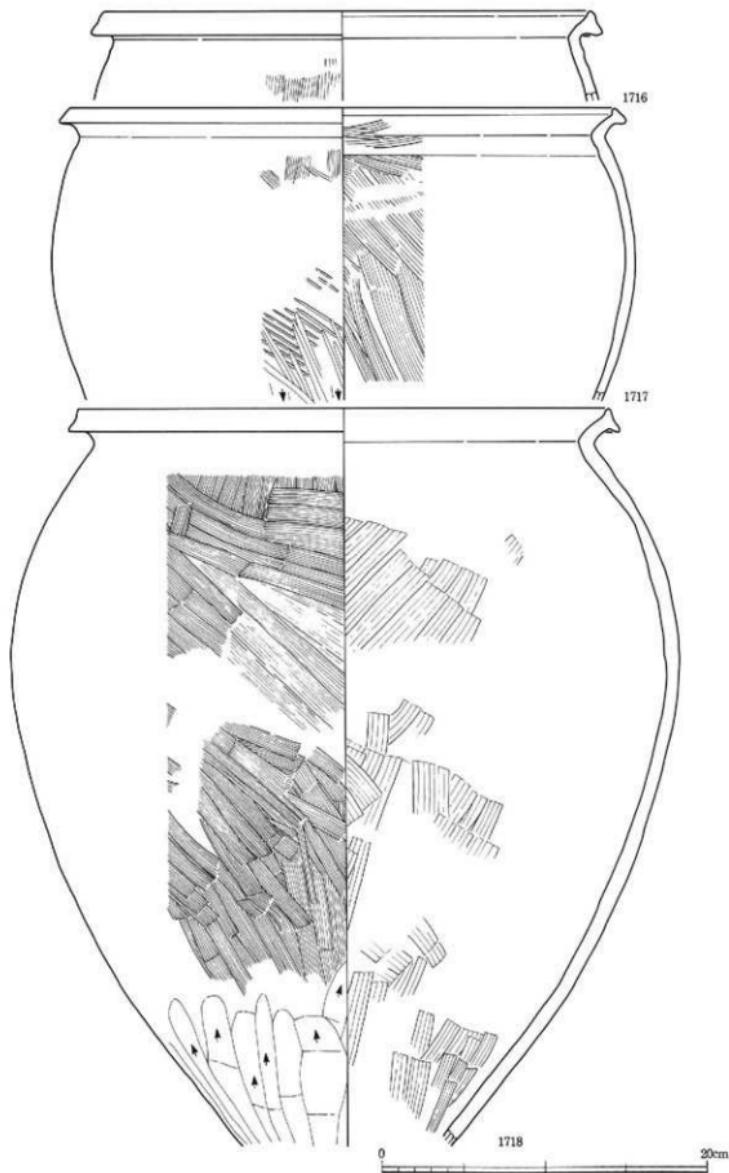


Fig. 283 SK 1143出土遺物実測図(3)

の小塊も數カ所に認められた。

2. 遺物(Fig. 281~283)

出土した土器の器種には、蓋(1685)、壺(1686~1693・1705)、器台(1694)、高杯(1695~1699)、甕(1704・1706~1718)、蛸壺(1700~1703)がある。

1685の蓋は裾部が笠形に開き、ややはね上げた口縁端部の外面に1条の凹線を配する。

1686は口縁端部をやや垂下させ、その外面に波状紋と円形浮紋を飾る広口壺である。1687の短頸壺は肩部からほぼ直立する口縁部の外面に、3条の凹線紋を巡らせている。1688は有段口縁の壺で、口縁部外面に2条、頸部外面に少なくとも3条の簾状紋を配する。1689~1693・1705は広口短頸壺で、法量から小形の1689・1705、大形の1693などに分けられる。また1689・1705は口縁端部を上方に拡張し、1690~1693は口縁端部を下方に拡張する。いずれもハケあるいはナデの平滑技法によって調整されている。

器台は脚裾部のみの破片で、体部外面に数条の凹線紋が巡っている。

高杯のうち1695は楕円高杯、1696は水平縁高杯、1697~1699は体部と口縁部が明瞭に屈曲する高杯である。1698・1699は口縁部の上下、1697は口縁部が屈曲する稜線の上下に、それぞれ凹線紋をもつ。

甕には小形の1704・1706~1711、大形の1712~1718がある。また口縁端部の形状は、上方にはね上げた1704・1707・1709~1711・1712、肥厚させた1706・1708・1713、上下に拡張させた1714~1718がある。また1704・1707・1711~1713は口縁端面に1~2条の凹線紋を巡らせている。

蛸壺はいずれも円筒状、あるいはやや内傾する口縁部に丸底を有する。

S K 2244

1. 遺構(Fig. 284, PL. 40)

B-2区、C12R P周辺に位置する土坑で、VI層を基盤層とする。検出面の標高は7.7mである。調査区の端部に位置するため全容は不明で、土坑の北側部分が検出されている。東西軸1.6mの不定形な形状と思われ、検出面からの深さは0.3mである。SK2244と、その北東側に接続するSK2245とは、外見上では浅い落込みによって連結するようであるが、この両者は異なった遺構である。土坑内堆積土の下層を中心として、土器がまとまって出土した。

2. 遺物(Fig. 285, PL. 122)

出土土器には壺(1719~1722)、鉢(1723~1726)、高杯(1727)、甕(1728・1729)、手焙(1730)がある。

1719・1720は広口壺Bである。1721・1722は口縁端部を肥厚させた広口壺Dで、1722は口縁端面に一定間隔で刻目を配している。

鉢では1723・1724の小形鉢A、1725・1726の小形鉢Bがある。

1727は長い体部と、緩やかに外反する短い口縁部を備えた有稜高杯Bである。

甕はいずれも弥生形甕Aであるが、1728の体部外面には縱方向タタキ成形痕が残るのでXの可能性もある。

手焙は突出しない平底を備えた浅い底部に、内湾気味に直立する体部をもつ。覆部は半球状に緩やかな曲線を描く。覆部と体部、体部と底部の接合部分にはそれぞれ貼付突帯を設け、軽い刻目を連続的に配している。底部外面にはタタキ成形痕を残す。

S K 2245

1. 遺構(Fig. 284, PL. 40)

B-2区、C12R Q周辺に位置する土坑で、VI層を基盤層として検出された。検出面の標高は7.6m

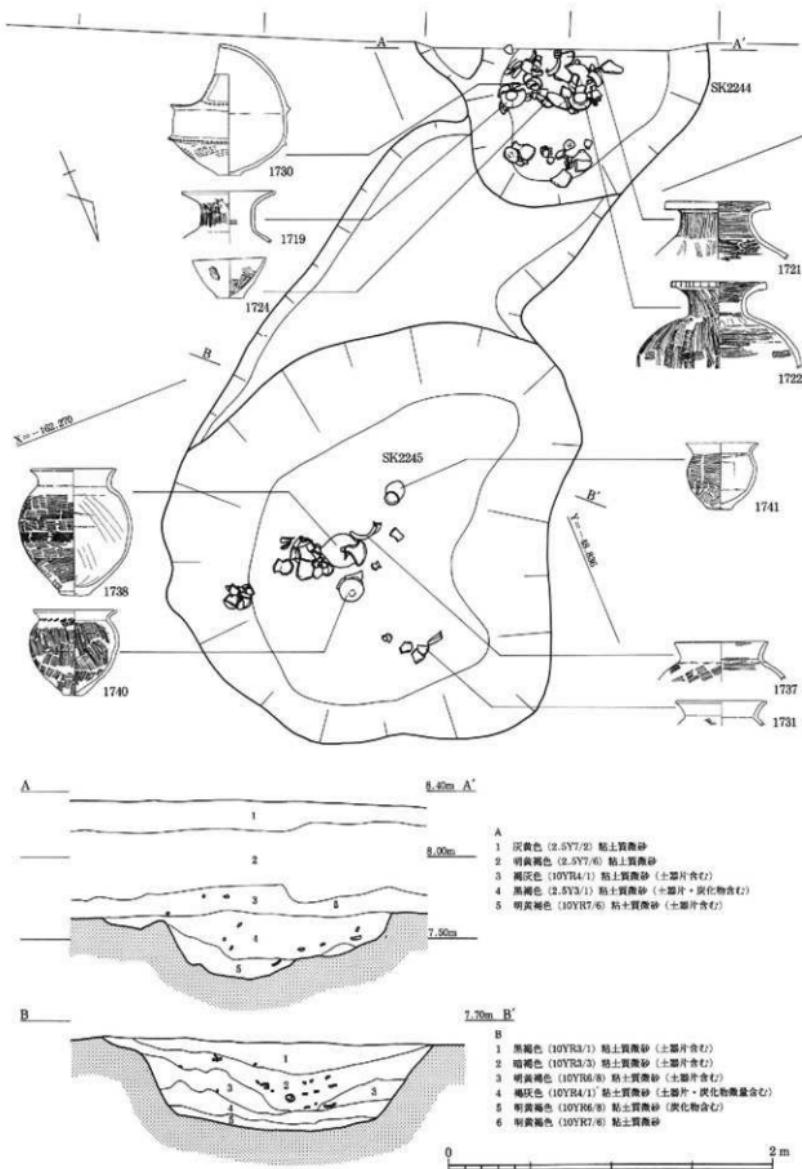


Fig. 284 SK2244・2245平面図・断面図

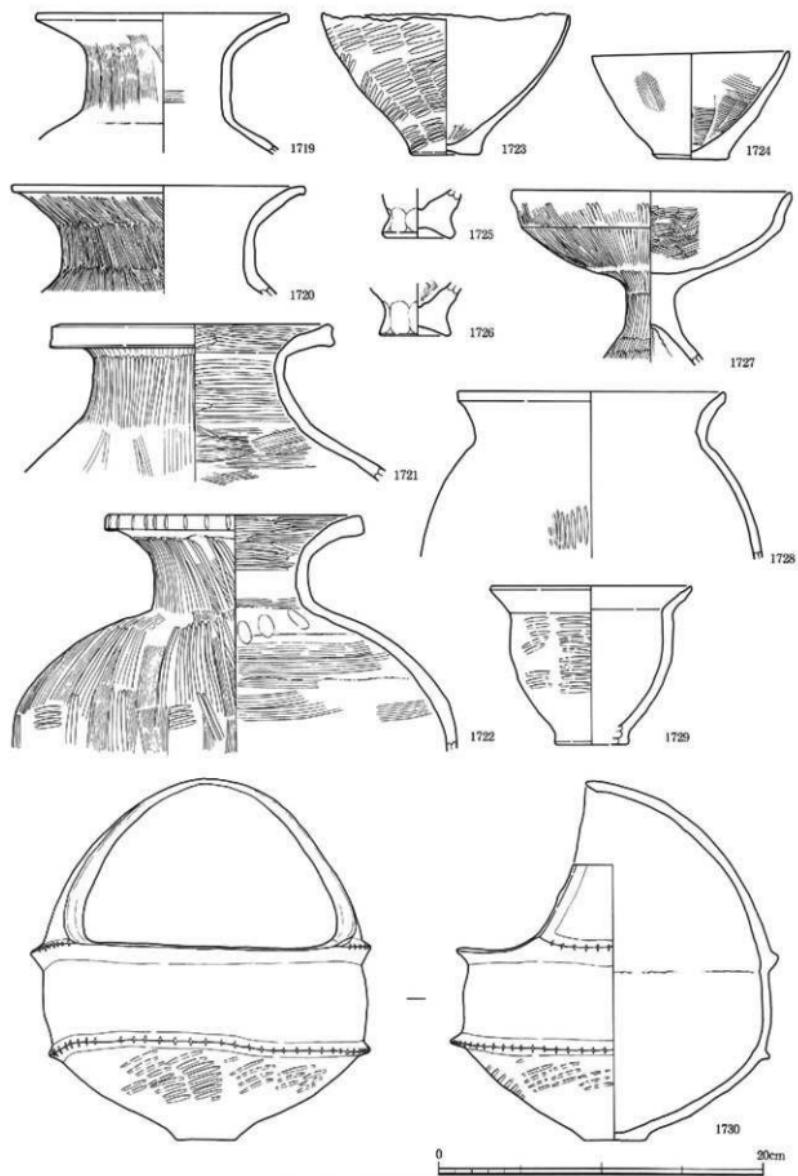


Fig. 285 S K 2244出土遺物実測図

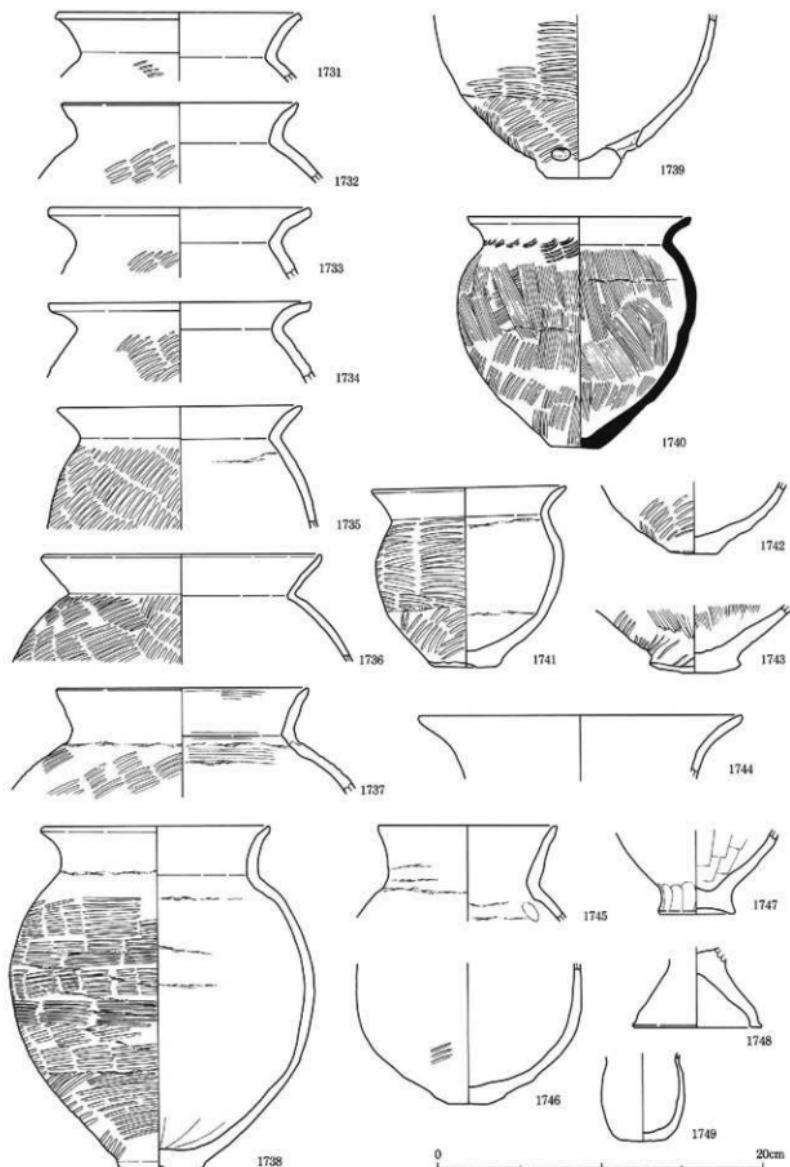


Fig. 286 S K2245出土遺物実測図

である。長軸2.8m、短軸2.5mの不定形な形状で、検出面からの深さは0.5mである。SK2245と、その南西側に近接するSK2244とは、外見上では浅い落込みによって連結するようであるが、この両者は異なった遺構である。土坑内堆積土の中層を中心に土器がまとまって出土した。

2. 遺物(Fig. 286, PL. 122)

出土土器には壺(1731～1743)、壺(1744～1746)、鉢(1747・1749)、製塙土器(1748)がある。

壺は1740以外は弥生形壺Aである。1739は底部付近に穿孔がある。1740は角閃石を含む生駒西麓産の胎土を有する壺で、体部外面にタタキを施した後、ハケで体部上半のタタキをナデ消している。口縁端部上面に緩やかな稜をもつ。

1744は広口壺Aの口縁部であろう。1745は広口直口壺、1746は球形に近い壺の下半部である。

1747は小形鉢B、1749は球形に近い体部に平底をもつ鉢で、器壁は薄い。

1748は三角錐状を呈し、ふんばった裾部をもつ製塙土器脚台である。

SK2246

1. 遺構(Fig. 287, PL. 41)

B-2区、C120X周辺に位置する土坑で、VI層を基盤層として検出された。検出面の標高は7.6m

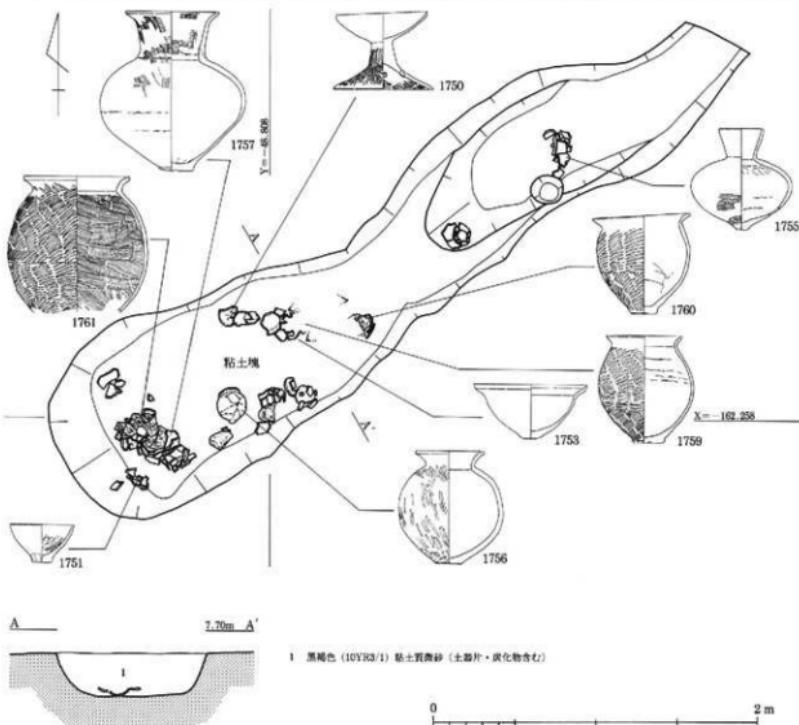


Fig. 287 SK 2246平面図・断面図

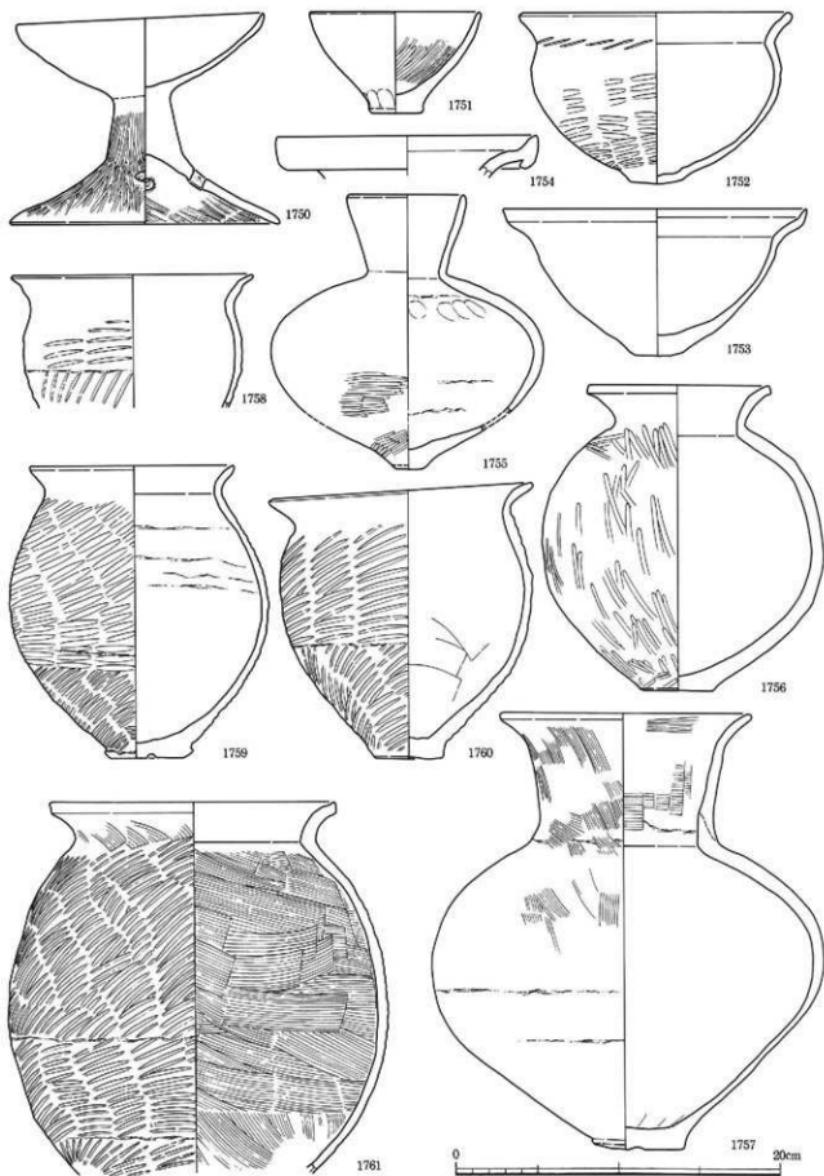


Fig. 288 S K 2246出土遺物実測図

である。最大幅1.2m、長さ4.9m以上で、南西から北東の方向に細長い帯状を呈するため、溝となる可能性もある。北東部は調査区外に及んでいて全長は不明である。検出面からの深さは0.3mである。土坑の底から土器がまとまって出土している。また径52×76cmの範囲で不定形な粘土塊も検出された。

2. 遺物(Fig.288, PL.123)

出土土器の器種には、高杯(1750), 鉢(1751～1753), 壺(1754～1757), 壺(1758～1761)がある。

1750は楕円形の浅い杯部、短く中実の脚柱部、広がった脚裾部を備えた楕円高杯Xで、この形態のものは本遺跡では他に出土例がない。

鉢のうちで1751は小形鉢A, 1752・1753は小形鉢Cである。

1754は口縁端部を上下に拡張した壺である。1755は極小の底部に扁球状の体部、短く外上方に延びる口縁部を備えた細頸直口壺である。1756は球形に近い体部に平底をもつ広口壺A, 1757は口縁部が直立して延び、端部付近でやや外反する壺である。

壺はいずれも弥生形壺Aで、1761は頸部から口縁部にかけてハケ調整されている。

S K 2247

1. 造構(Fig.289, PL.41)

B-2区、C12O X周辺に位置する土坑で、VI層を基盤層として検出された。検出面の標高は7.6mで、S K 2246の東側に近接した位置にある。北東部の一部は調査区外に及んでいて全容は不明であるが、長軸2.3m以上、短軸0.9mの不定形な土坑で、検出面からの深さは0.2mである。底から土器がまとまって出土している。

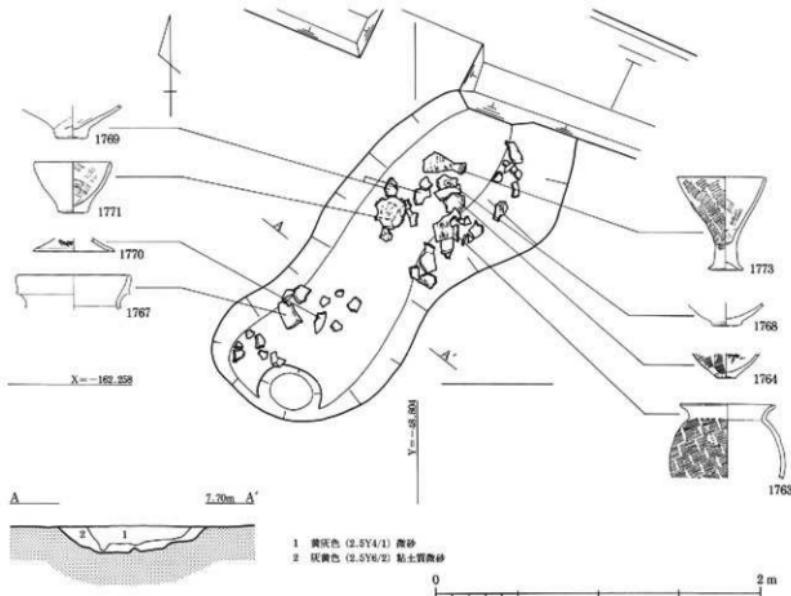


Fig. 289 S K 2247 平面図・断面図

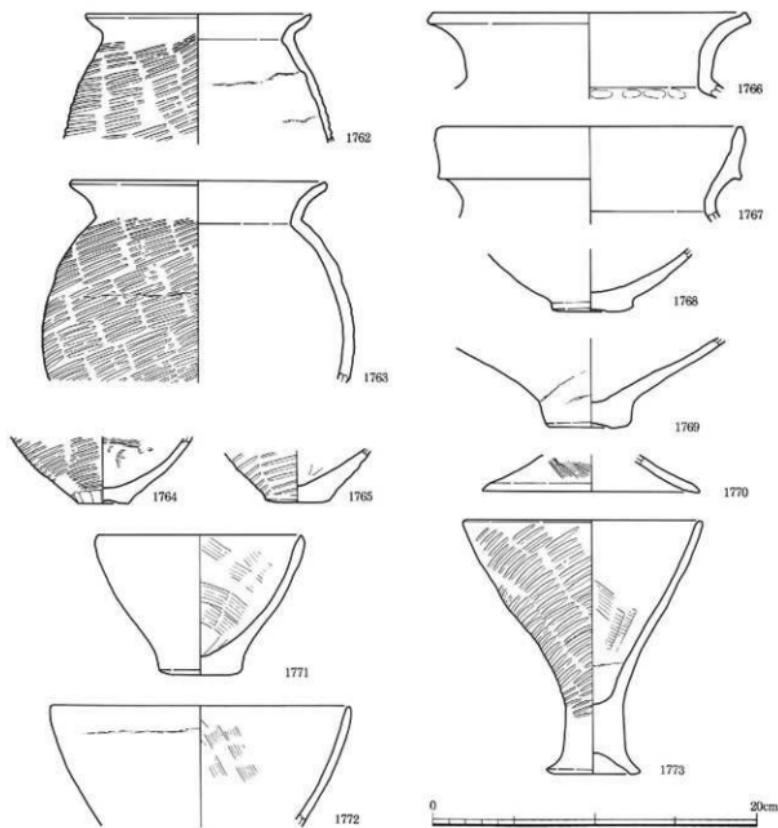


Fig. 290 S K 2247出土遺物実測図

2. 遺物(Fig. 290, PL. 124)

壺(1762～1765), 壺(1766～1769), 高杯(1770), 鉢(1771・1772), 製塩土器(1773)がある。

壺はいずれも弥生形壺Aで、体部は右上がり、もしくは水平方向のタキによって成形され、内面は平滑技法で調整されている。口縁部の形態はhである。

壺のうち1766は広口壺A, 1767は複合口縁壺である。1767は太めの頸部から急角度で立ち上がる短い口縁部をもつ複合口縁壺で、口縁部の張りは弱く鈍重な感がある。1768・1769は体部が張り出した壺の底部であろう。

1770は高杯の脚裾部と思われる。

1771は小形鉢Aである。また鉢に含めた1772は、口縁部が他例よりも大きめの個体である。

1773はタキ成形された逆円錐形の体部に、上げ底状の脚台を付加した製塩土器Bである。体部と底部の間にはやや長い中実部がある。

SK 2248

1. 遺構 (Fig. 291, PL. 42)

B-2区、C12P Y周辺に位置する土坑で、VI層を基盤層として検出された。検出面の標高は7.5mである。南北軸2.8m、東西軸2.8mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.5mである。壁面は上半では傾斜をもつが、下半では抉れたように急角度で落ち込んで底に至っている。底はほぼ平坦な面を成している。埋土には若干の炭化物を含み、また少量の土師器片が出土した。

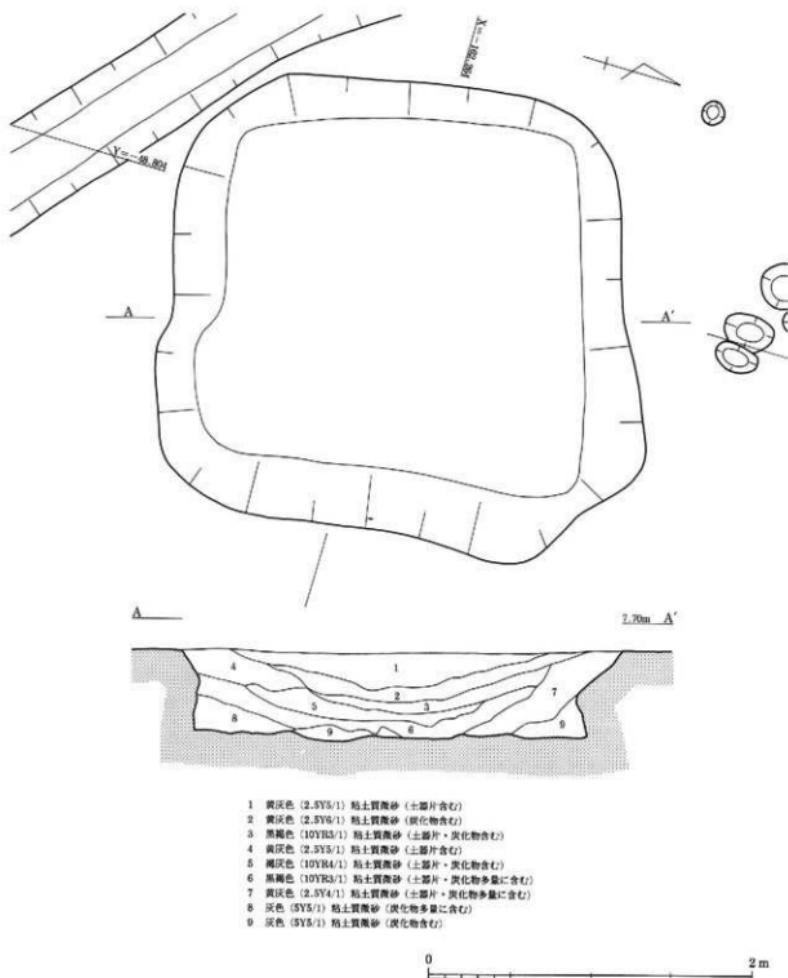


Fig. 291 SK 2248平面図・断面図

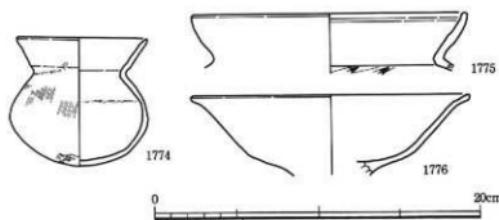


Fig. 292 S K 2248出土遺物実測図

2. 遺物 (Fig. 292, PL. 125)

1774はやや扁球状の体部に短く直線的に立ち上がる口縁部を備えた小形丸底土器である。1775は布留式壺で、口縁端部が僅かに内側に肥厚する。1776は布留系高杯で、杯部は体部から緩やかに延びて口縁部は僅かに外反する。

S K 2249

1. 遺構 (Fig. 293, PL. 42)

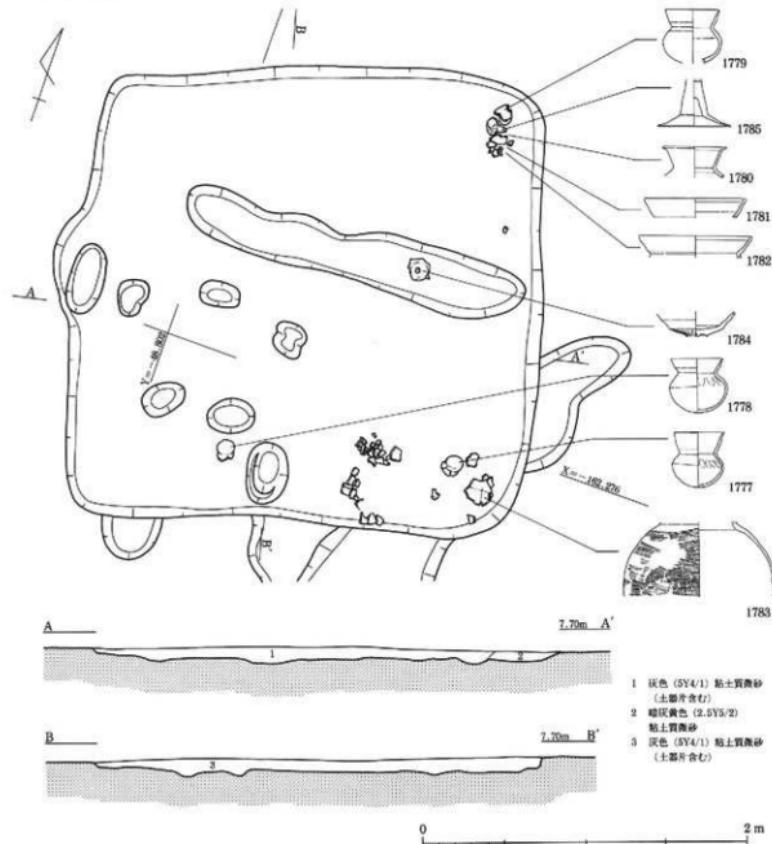


Fig. 293 S K 2249平面図・断面図

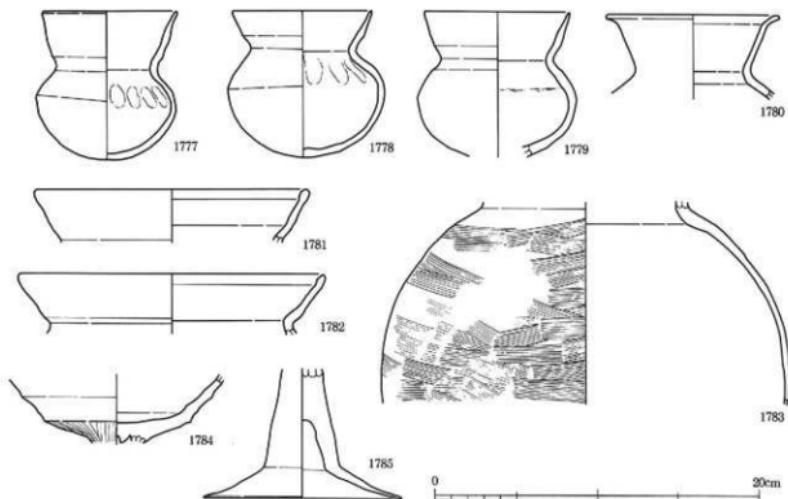


Fig. 294 S K 2249出土遺物実測図

B-2区、C12S Y周辺に位置する土坑で、VI層を基盤層として検出された。検出面の標高は7.6mである。南北軸2.7m、東西軸2.9mの隅丸方形を呈する。浅い底面があり、検出面からの深さは0.1mである。底面には溝状やピット状を呈する窪みが認められたが、いずれも極めて浅く遺構と認定し難い。底面に接するように土師器が検出されている。また土器の出土位置は、土坑の北東隅、および南東隅に比較的集中している。柱穴等の施設は一切検出されなかったが、堅穴住居の可能性も皆無ではない。

2. 遺物 (Fig. 294, PL. 125)

出土遺物には小形丸底土器(1777~1779)、壺(1780)、甕(1781~1783)、高杯(1784・1785)がある。

小形丸底土器は扁球状でやや肩の張った体部に、比較的短い口縁を付加している。頸部のヨコナデが強く、口縁部と体部の間には括げが形成されている。

1780は器壁が薄い小形の壺で、直線的に外上方に延びる口縁をもち、端部はさらに外方に屈曲する。

甕はいずれも布留式甕と思われ、口縁部を残した1781・1782では、やや内湾する口縁部をもち、端部は内側に緩やかに肥厚する。1783は甕の体部上半で、外面に横方向のハケが施されている。磨耗のため内面ケズリについては不明。

高杯1784は口縁部を失った破片で、体部外面には放射状の粗いハケ調整がある。1785は脚部で、上半部が中実の脚柱部、短く広がる脚裾部から構成されている。

S K 2350

遺構 (Fig. 295, PL. 43)

B-3区、C13R I周辺に位置する土坑で、VI層を基盤層として検出された。検出面の標高は7.2mである。南北軸3.3m、東西軸3.6mの隅丸方形を呈する。検出面から底面までの深さは0.2mである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。南西寄りの壁際には部分的に溝が巡り、また中央部その他の底面にはピットや浅い土坑状の窪みが認められた。土坑の中央部で東西方向に並んだ3ヵ所のピットについ

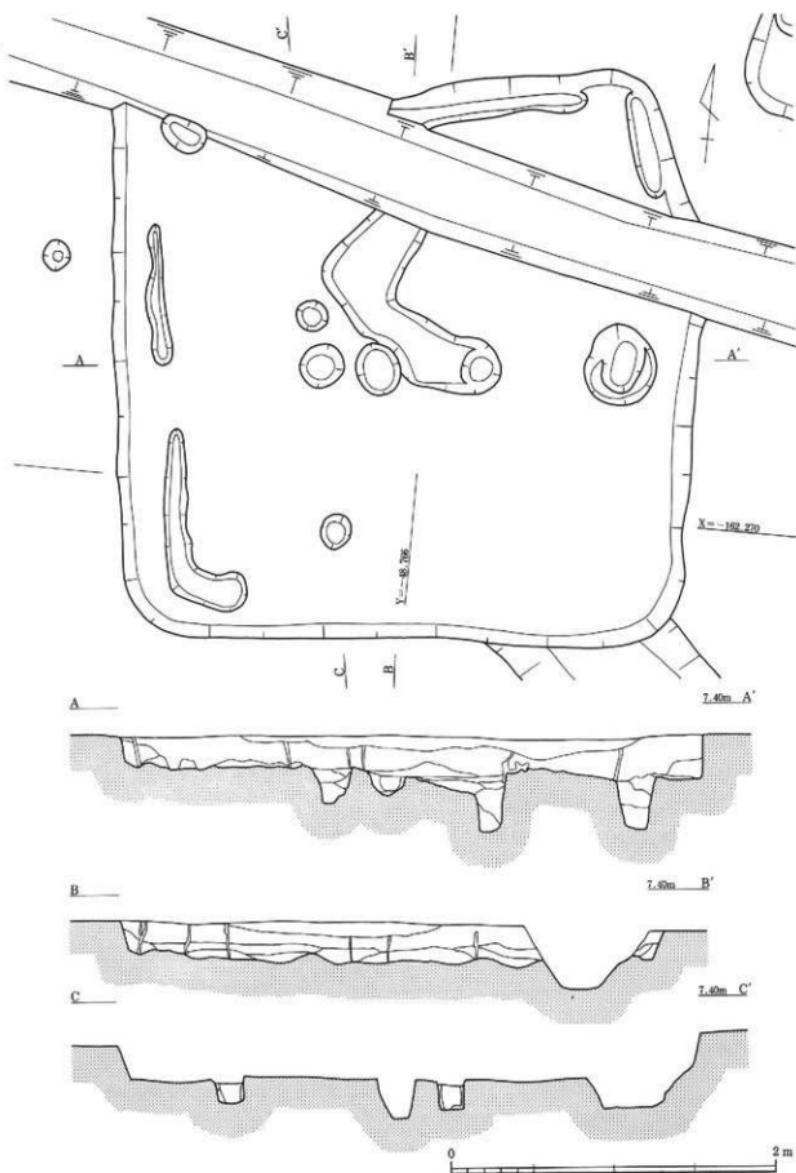


Fig. 295 S K 2350平面図・断面図

ては、規模や深度などから柱穴とも考えられる。特にピットの配列に規則性は見出せないが、この土坑が竪穴住居となる可能性も皆無ではなかろう。断面には底面を割った多数の噴砂痕跡がある。遺物は全く出土しなかったが、南東部で土坑S K2351を切っているので、この土坑より後に形成されたといえる。

S K2351

1. 遺構(Fig. 296, PL.43)

B-3区、C13R I周辺に位置する土坑で、VI層を基盤層として検出された。検出面の標高は7.2mである。北西部の一部をS K2350によって切られている。長軸2.4m、短軸0.8mの不定形な土坑である。底は南東側から北西にかけて段差を有しながら標高を下げており、検出面から底面最深部までは0.8mである。短軸の壁面は垂直に近い急角度で立ち上がっている。土坑のはば中央部から、下層を中心にまとめて土器が出土した。

2. 遺物(Fig. 297)

出土土器の器種には、甕(1786～1790)、壺(1791)、鉢(1792・1793)、鉢(1794・1795)がある。

甕はいずれも弥生形甕Aで、右上がりのタキで成形を行う。体部は無花果状で体部上半に最大径がある。1788は頸部から口縁部にかけてハケ調整がある。1789・1790は甕の底部であろう。

1791は長頸壺Bで、口縁部と体部外面を密なミガキAで最終調整する。

1792・1793はほぼ同形同大の鉢壺Bで、直立もしくはやや内湾した口縁部に丸底を備えている。体部

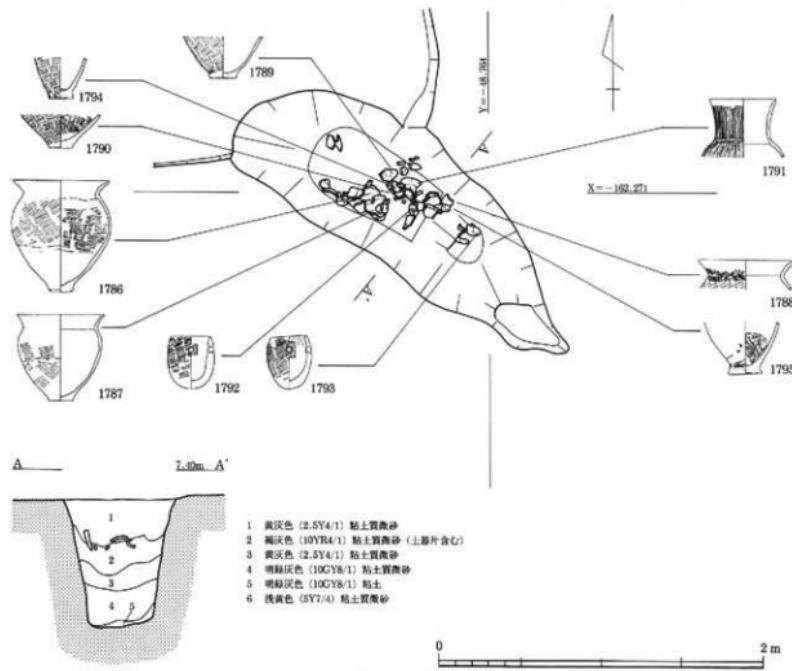


Fig. 296 S K2351平面図・断面図

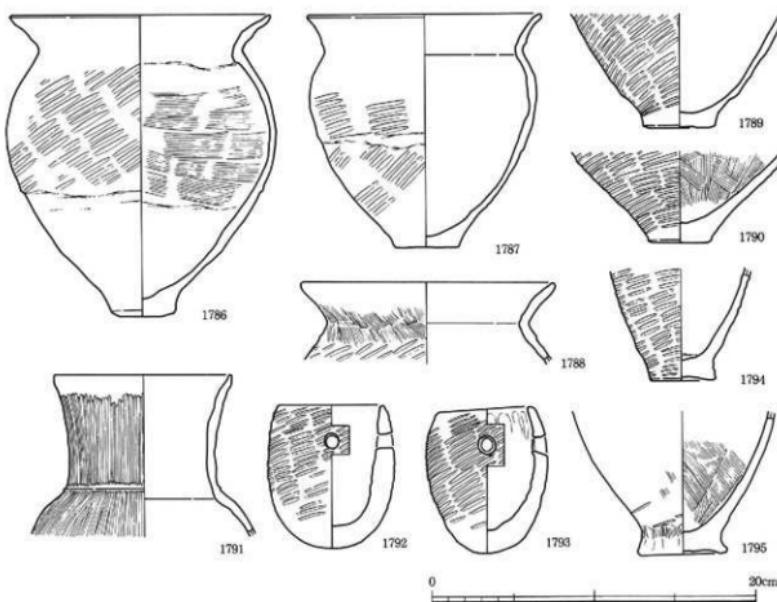


Fig. 297 S K 2351出土遺物実測図

は比較的短い。外面には共に右上がりのタタキ成形痕を残している。

1794・1795は分類上で鉢に含めたが、他の器種の可能性もある。1794は平底をもつ体部下半で、体部は急角度で立ち上がる。1795は小形鉢Bと形態的に類似するが、法量が大きい。

S K 2252

1. 造構 (Fig. 298, PL. 43)

B-2区、C12NTに位置する土坑で、VI層上に薄く堆積した微砂層を基盤層として検出された。検出面の標高は7.7mである。位置的には竪穴住居S A 2216の北西側の至近距離にある。上半部は削平され造構の底付近が遺存するに過ぎない。検出段階での長径は0.4m、短径は0.3mで、橢円形を呈している。検出面から底までの深さは4cmである。土坑の中央から壺が出土した。壺は口縁部を下方に向け、口縁端部は土坑の底に接している。体部は遺存せず、削平によって失われた可能性がある。

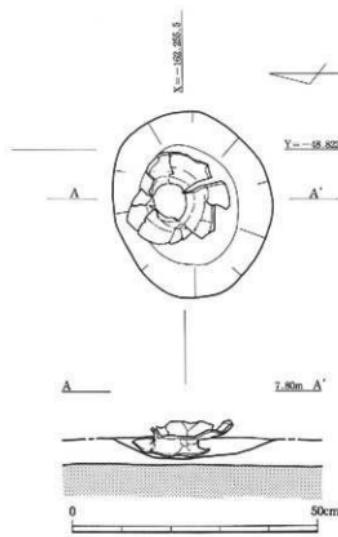


Fig. 298 S K 2252平面図・断面見通図

2. 遺物(Fig. 299)

1796は複合口縁壺である。土坑内では口縁部を下に向けて僅かに傾斜して出土しており、後の削平によって肩部の一部を含めて体部を欠損する。頸部は肩部から緩やかに屈曲しながら外反する受部に至る。受部には外上方へ直線的に延びた口縁部を付加している。表面はかなり磨耗しているが、頸部外面には僅かにハケ調整痕が観察される。

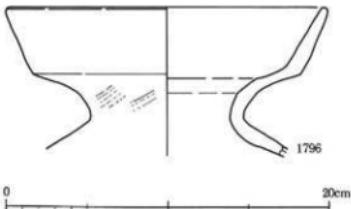


Fig. 299 S K 2252出土遺物実測図

S D 2255

1. 遺構(Fig. 300, PL. 44)

B-2区のほぼ中央東寄りで検出された溝である。南東から北西にかけてやや蛇行しながら縱断する溝で、検出全長は42mを測り、両端はそれぞれ調査区外に及んでいる。幅は50~80cm、検出面から溝底までの深さは33~45cm、溝底の標高は南東端で7.6m、北西端で7.5mであり、北西方向への流水があったと思われる。壁面は急角度で掘り込まれており、また底面もほぼ平坦面を成しているので、逆台形の断面形態を呈する。埋土から出土した遺物は僅少である。

2. 遺物(Fig. 301)

出土土器は量的には少ないが、弥生土器、古式土師器、須恵器を出土し、時期幅が大きい。器種には、壺(1797・1800)、器台(1798)、壺(1799)がある。いずれも細片である。

1797はタタキ成形された弥生形壺Aである。1800は須恵器壺の口縁部の一部で、2条の凸線で区画し

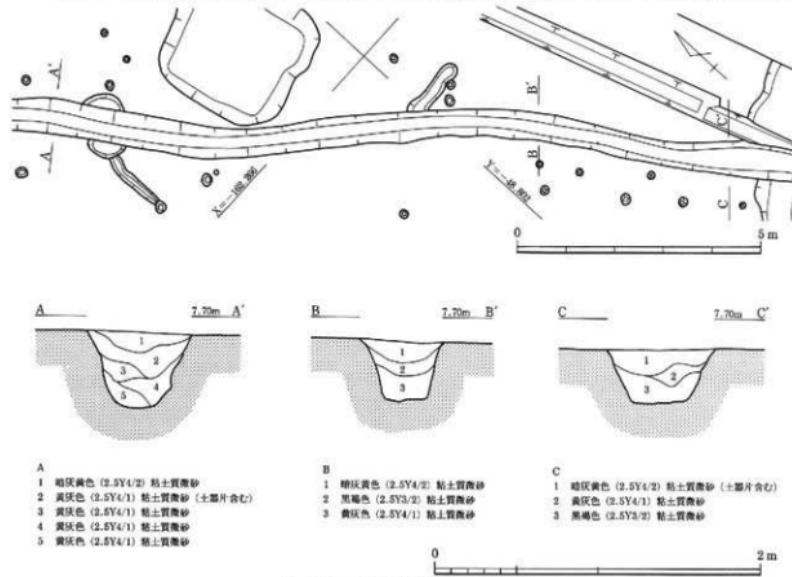


Fig. 300 S D 2255平面図・断面図

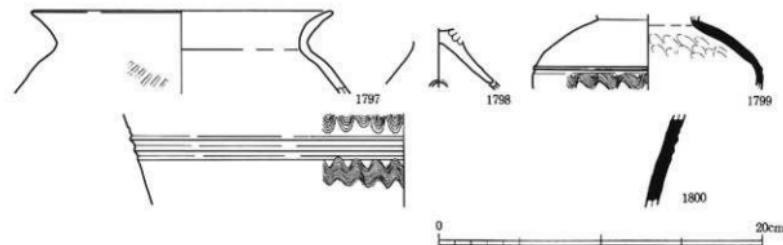


Fig. 301 S D 2255出土遺物実測図

た上下に、波状紋を巡らせていている。

1798は口縁部、脚裾部を欠いた小形器台Bである。

1799は須恵器壺の体部上半で、体部は低い凸線によって肩部と画され、その直下の最大径部に波状紋を施している。翫の可能性もある。

第4項 中世～近世

S D 2256

1. 遺構(Fig. 302, PL. 44)

B-2区を南南東から北北西に斜めに横断する溝で、条里制区画割と関連を有する遺構である。VI層上に堆積したオリーブ褐色(2.5Y5/3)粘土質微砂を基盤として掘削され、断面観察からは畦畔など他施設の存在は確認できなかった。溝は幅72cm、深さ12cmで、検出全長は33mである。溝の方位はN-15°-Wで直線的に走行し、また現在の里道、畦畔と位置的によく合致している。坪を画する溝と思われる。

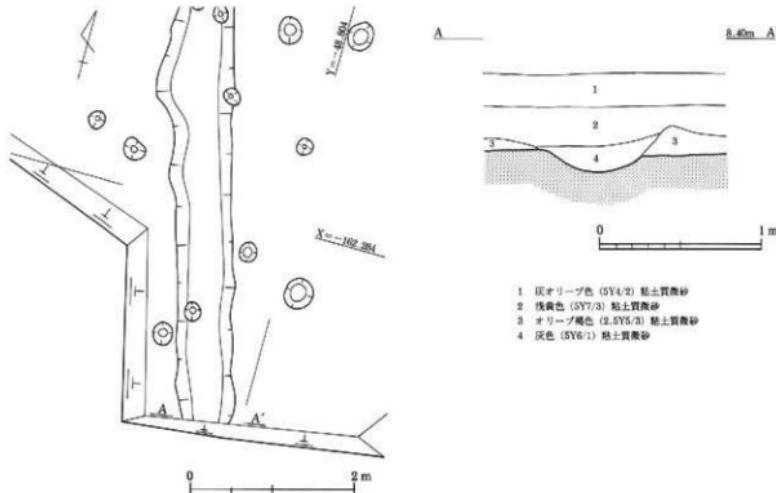


Fig. 302 S D 2256平面図・断面図(部分)

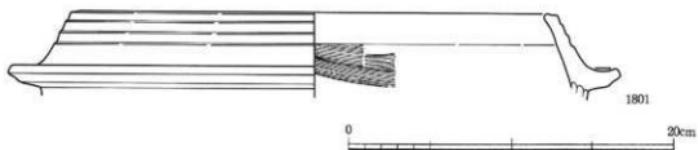


Fig. 303 S D 2256出土遺物実測図

本文篇第2章第3節に記したように、周辺地域に残存する条里坪付地名からS D 2256を境として西が19坪、東が30坪であることが分かる。溝の断面は浅いU字形で、埋土は灰色(5 Y6/1)粘土質微砂である。

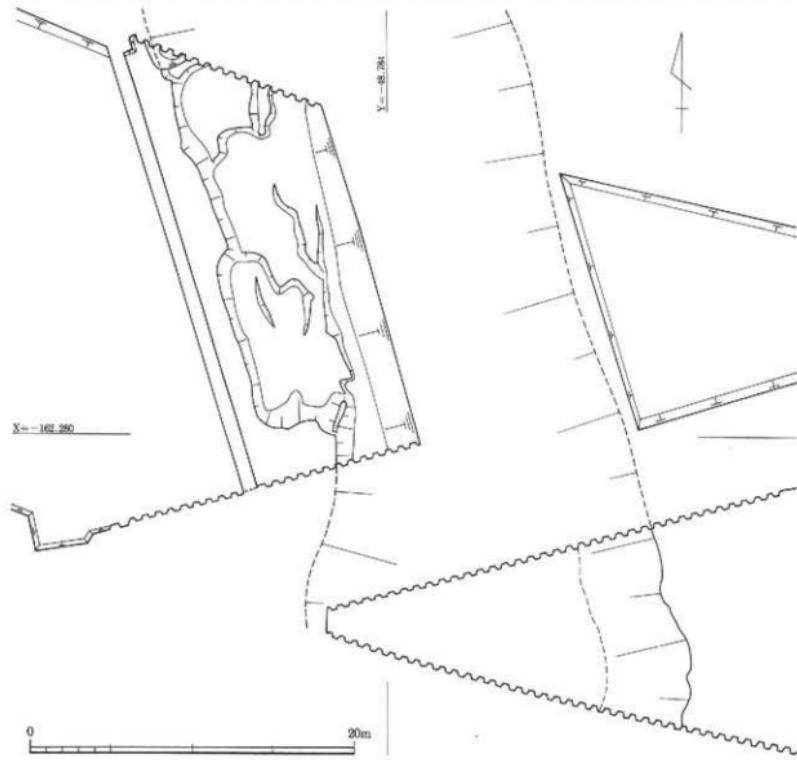
2. 遺物(Fig. 303)

埋土から瓦質釜(1801)が出土した。13世紀。

N R 2210

1. 遺構(Fig. 304, PL. 45)

B-2区南東端、B-1区西端で検出された近世の流路である。検出標高は7.5mで、VI層を大きく



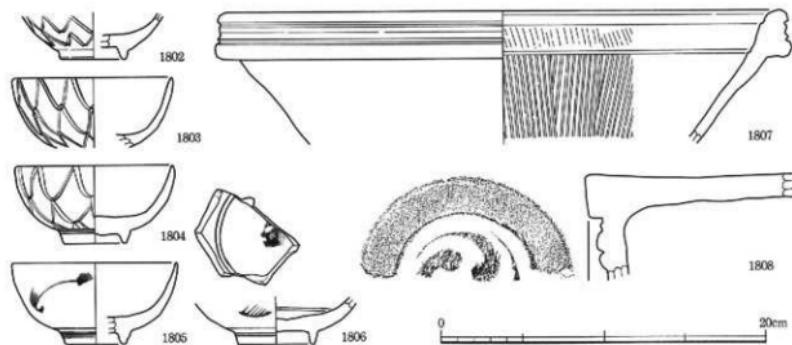


Fig. 305 NR2210出土遺物実測図

切り崩して形成されている。ほぼ南北に流路方向をもち、南から北への流水機能があったと思われる。流路幅についてはB-2区では左岸、B-1区では右岸がそれぞれ部分的に検出されたため、正確な規模は知り得ない。しかしB-2区と里道を挟んだB-3区では川岸が確認されなかつことから、右岸は里道の直下までにおさまるはずであり、従って推定される河道幅は20m以下となろう。深さは検出面から6.3mまで確認されているが全掘はできなかつた。流路内はほぼ全面が砂層で充填されており、またB-1区、B-2区共に垂直に近い角度でVI層上の遺構面を大きく切り崩していることから、比較的短時間の内に激しい流れが存在したことを窺わせる。流路内はほとんど川砂によって埋め尽くされていた。

2. 遺物(Fig. 305)

流路内に堆積した砂層から染付碗(1802～1806)、擂鉢(1807)、丸瓦の瓦当(1808)などが出土した。18世紀の陶磁器が主体を占めるようである。

碗はいずれも波佐見焼で、1802～1804は外面に二重網目紋、1805は草花紋、1806は丸窓紋を飾る。

1807は堺焼の擂鉢と思われ、内面の全面には逆時計回りで擂目が施されている。

1808は巴紋をもつ丸瓦の瓦当の破片である。

NR2111

遺構(Fig. 306, PL. 45)

B-1区の北東端、C13S X周辺に位置した近現代の流路痕跡である。II層上面で検出され、調査区の端にかかった状態で、南東から北西に向かう流路の一部分が検出されている。検出全長は14m、検出面からの深さは0.3mであるが、流心はさらに北東方向にある。調査地の東側には、石津川改修工事以前の蛇行した流路痕跡が残されており、NR2111も改修以前に形成されたであろう蛇行流路のひとつと考えられる。埋土は砂層のみである。遺物は全く出土しなかつた。

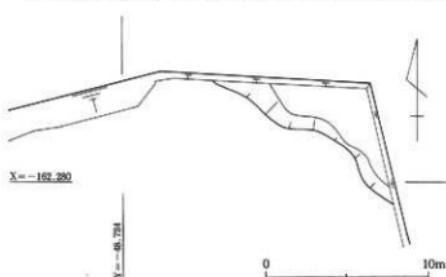


Fig. 306 NR2111平面図

S E 1341

遺構(Fig.307, PL.46)

A-3区、C11D R周辺に位置する井戸で、検出標高は7.2mである。大溝S D1305の左肩部に位置し、上層ではVI層を大きく掘り込んで形成されているが、下部は繩紋時代の流路N R1302の堆積層に及ぶ。掘形は長軸4.1m、短軸3.4mで南西から北東に広がる不定形な形状で、垂直に近い急角度で掘り込まれている。掘形内部の北東部には木組の井戸本体構造物が設置されている。安全面から全掘はできなかつたが、2段分の井側が確認された。この井側は1辺15cm、長さ202cmの角材4本を隅柱としている。さらに隅柱に穿たれた枘穴に、それぞれ5本ずつの横桟をわたして結合し、外側に縦板を貼って1辺139cmの方形に組み上げている。構造材には手斧痕が明瞭に残されていた。この井側のさらに下部には、ほぼ同じ構造と思われる井側の一部が検出され、両者の結合には鉄釘が用いられていた。全掘は行い得なかつたので、井筒の存在等は明らかにできなかつた。

1段目の井側の隅柱や板材は、最上部付近が風化によって激しく傷んでいたが、それ以下は比較的良好に遺存していた。また最上段付近を除き、それぞれの枘穴の周辺には墨書が認められた(Fig.308)。墨書は角材の内側2面にあって、平仮名と数字の組み合わせで構成されている。井側の方位はほぼ座標軸と一致しているが、4本の隅柱について便宜的に北西のものを第1隅柱とし、逆時計回りに1~4まで番号を与えると、各隅柱の墨書は上から下へ次の通りに読み取れる。

第1隅柱	□□□	いノ七	いノ八	いノ九	いノ十
	□□	ろ二	ろ三	ろ四	ろ
第2隅柱	□□	ろ八	ろ九	ろ十	
	□□	は二	は三	は四	は五
第3隅柱	□□	は七	は八	は九	は
	□□	に二	に三	に四	に
第4隅柱	□□	に七	に八	に九	に
	□□□	いノ二	いノ三	いノ四	いノ五

すなわち平仮名は「い～に」の4文字で、数字は消失した最上段のものを復原すると、上から「一～五」および「六～十」であるが、欠字もある。各隅柱について、逆時計回りに「い」～「に」の平仮名、上から下へ「一」～「五」の数字が付されている。すなわち平仮名は隅柱の水平方向、数字は垂直方向の位置を示す記号である。隅柱の記号は同じ平仮名、例えば「い」に付けられた「一」～「五」が、正位置に組んだ場合に同じく「い」の「六」～「十」と対面するように作られている。その他、隅柱には墨書の削付線が残されているので、この寸法から当時の正確な設計基準を知ることができる。尺貫法によれば隅柱は5寸角で、横桟は1尺5寸間隔で配置されたことになる。また隅柱の内側の角を示す「内角」の文字が2カ所に認められた。以上のことから、この井側は別の場所で製作され、部材の位置関係を示す墨書を記入の上で分解され、再び現地において組み立てられたことが分かる。従って調査では確認できなかつたが、横桟にも墨書が存在した可能性がある。

埋土から遺物は全く出土しなかつたが、近世に構築された井戸と思われる。専業的な井戸職人の手になるものであろう。

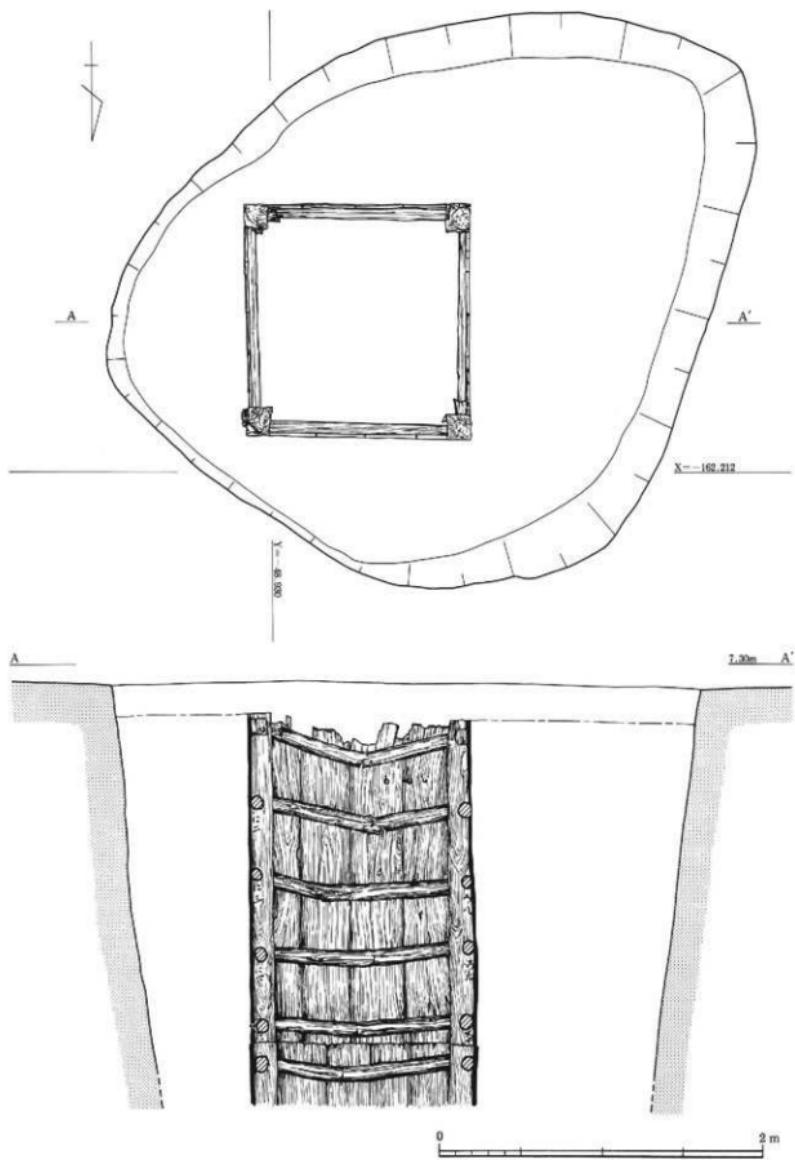


Fig. 307 SE 1341平面図・断面見通図

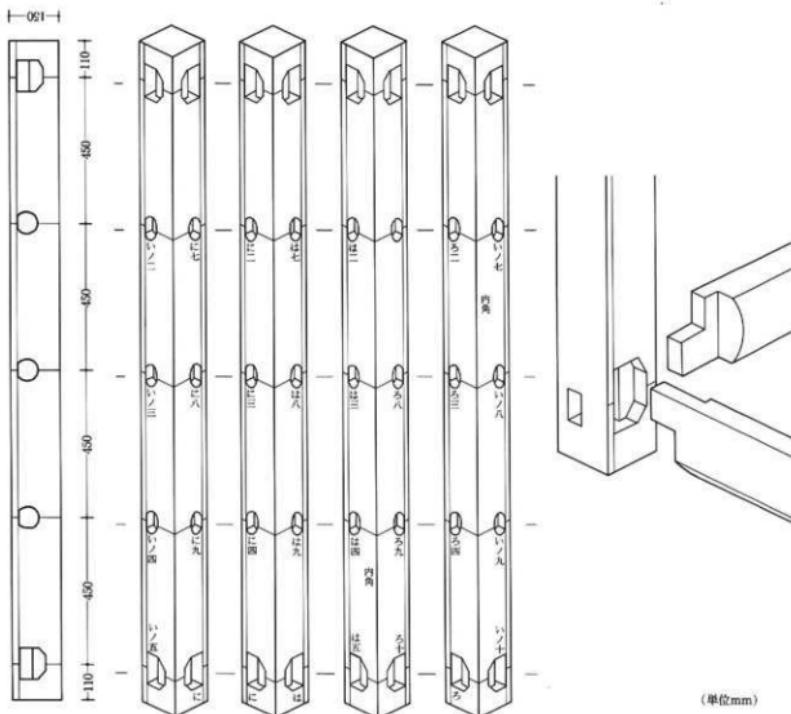


Fig. 308 S E 1341井側隅柱構造模式図

S E 2142

遺構 (Fig. 309, PL. 46)

B-1区、C13T Q周辺で検出された井戸である。古墳時代の埋没河川N R 2109の流路内に堆積した砂層を基盤として構築されている。検出標高は7.6mである。掘形は長径4.2m、短径4.0mの円形に近い椭円形を呈している。安全面から全掘には至っていないため、掘削深度は不明である。掘形のはば中央部には、木組によって井戸の本体構造物が構築されている。井戸枠などの上部構造は完全に失われていたが、井戸枠周辺の踏板、井側、桶側が残存していた。井側は1辺16cm、長さ204cmの角材4本を隅柱とし、それぞれ4本ずつの横桟をわたして枘穴結合で固定している。さらにその外側に縦板を並べて1辺156cmの方形に組み上げている。この上に井戸枠周辺の踏板が部分的に残存する。踏板は井側の辺に対して45°の角度で配置された板材である。また井側の最下部には直径75cm、高さ96cmの円筒状の桶側が据えられていた。桶側は多数の板材を円形に組んだもので、外面にタガの痕跡が認められ、また地中に埋設し易いように、下端部を削って先鋒にしていた。

井側の内部から多数の井戸瓦が落ち込んだ状態で検出されたが、陶磁器等の遺物は出土しなかった。近世に構築された井戸と思われる。

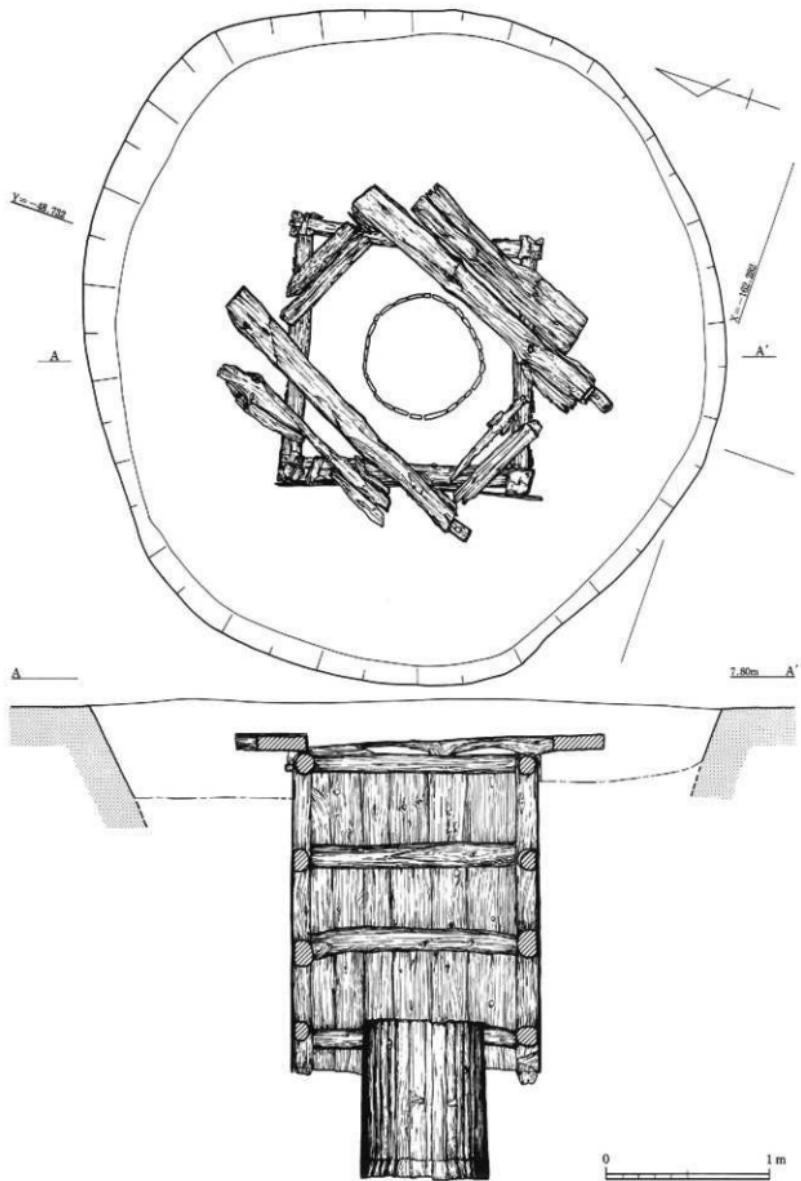


Fig. 309 SE 2142平面図・断面見通図

第5章 銅鐸

第1節 銅鐸発見にいたる経過

第1項 銅鐸出土直前の調査状況

JR阪和線から西側の調査は排土スペース確保等の制約もあり、当初JR線寄りの狭い範囲から始めた。調査が進み古墳時代中期の竪穴住居1棟と庄内併行期の井戸1基や自然河道の東側肩口部分を検出している。河道肩口部分を先行して試掘した結果、弥生時代後期から庄内併行期の土器を多量に包含していることを確認した。

このため河道部分の調査を進めるためには調査方法の変更が必要となった。沖積地は脆い、隣接するJR線の軌道敷きなど道床の安全も確保しなければならない。関係機関と協議をかねて鋼矢板を打設して調査を継続させることとなる。協議から鋼矢板打設完了まで正月休みをはさんで約2ヶ月の期間を要している。調査再開後「コ」の字形に鋼矢板を打設した区間をA-1区として拡大し調査している。

調査はA-1区で検出した自然河道N R1104のプラン検出から始めた。河道の埋没過程の観察のため、河道に出来るだけ直交する形で、調査区を斜めに横断する形にセクションベルト(断面観察用畦・以後セクションと略称)を設定し、あわせてセクション南西部側を先行してトレーンチ掘り(試掘)している。試掘により東肩部分に集中して土器の堆積を確認するとともに、西肩部分では葦の埋没層やさらに下層部に木材・木製品・動植物遺体などの堆積を確認している。

断面観察の結果、河道は徐々に埋まり、最上部には古墳時代前期の溝S D1108が形成され、やがて埋没したことが確認された。これらの成果をふまえ、河道の予測される深度と作業時の排土方法や作業員の移動等を考慮して、セクションの幅も広くとり約2mの幅とした。

一方調査区西側部分では微高地地形を検出した。微高地上では古墳時代前期の竪穴住居S A1114・1115を検出し、調査進捗状況の都合上、河道上の溝検出に先行して調査を終えた。

微高地頂点から北および東斜面の下層部に弥生時代中期の遺物包含層を確認している。西側には弥生時代中期から庄内併行期にかけて存在した溝S D1305が立地している。以後微高地周辺部の調査は弥生時代中期の遺構面をめざして進めることとなる。地形を考慮してほぼ東西南北4方向に土層観察用のセクションを設定して徐々に掘り下げ遺構の検出を試みた。包含層を除去した最終面で弥生時代中期の土坑S K1143を検出している。土坑は青灰色のベース面に穿たれ、埋土も青灰色で平面的には検出が難しく、河道部を貫くトレーンチの北端部に一部がかかりその存在をはじめて確認することが出来たもので、わずかに炭化物の混入が認められる程度の差しかないものであった。

河道部では溝S D1108内で木製品・土器などが多量に検出され、出土状況の実測や写真撮影などが行われ、また直ちに遺物の取り上げが行われるなど輻輳した作業状況となり、加えて調査の進捗状況の遅れなどの問題もあり、河道の掘り下げも東肩部分から始めることとなる。

木製品の乾燥は早い、特に材の薄い木製品は早い、時間との競争である。不本意ながら何点かは乾燥させてしまった。無残にも反り返った茄子型の鍼を横目に作業を続ける。それにしても時間がない。鋼矢板打設までの約2カ月間の時間が惜しい。

微高地周辺部の調査と河道部の調査も重なって、セクション上から枝状に分かれて配置されているベ

ルトコンペア上は排土の帯となり、さながら調査区全体がギシギシと軋むがごとくであった。

第2項 銅鐸の発見と対応

河道の掘り下げに際しては東肩付近の土器溜まりの検出と河道肩口の落ち込みの確認に努めた。沖積地は脆く、調査区を「コ」の字に囲うように打ち込んだ鋼矢板の長さとその自立安全深度を考慮して掘り下げたが、河底にまでは達しなかった。その役目を終え不要となったセクション部分の取り外しも東肩部分から併せて行っている。

河道の掘り下げが進み溝に迫ってくる。いよいよ木製品の取り上げを急がねばならない。セクションの掘削がほぼ終わりに近づいた2月10日午前11時10分頃、B地区での担当者との打ち合せを終え再び溝内の木製品の取り上げ作業を始めた直後、右上方のセクション上から「出たあー。銅鐸や！」の甲高い作業員の声が響く。半信半疑で溝斜面を勢い良く駆け上ると、一瞬自らの目を疑ったが、そこには粉れもなく鮮やかな光沢を放つ「小型の銅鐸」があった。作業員も興奮している。作業を止めて見にくるものもいて、たちまち人だかりが出来てしまった。「このままでは遺構が危ない！」混乱のなかですぐ指示したことは「現場保存」の一言であった。セクション上に横たわるコンペアを移動し、付近を踏み荒らされないように人を遠ざけた。作業員にも恵まれた。コンペアの繋ぎ部分の高まりと横方向から差し込まれたスコップの痕が生々しい。よくも偶然が重なったものである。出土後直ちに連絡をしたB地区の同僚担当者も到着し、半信半疑の表情が見る見るうちに変わっていくのがわかる。

突発的な銅鐸の出土であった。現場での「現場保存」を確実に行い直ちに本部へ報告しその指示を仰いだ。本部では指導的立場にある大阪府教育委員会文化財保護課(以後保護課と略称)に銅鐸の出土と現状を報告し、その対応を協議することとなる。この間に保護課から奈良国立文化財研究所へ第1報が届けられ、両者間で保存処理についての具体的な交渉が進められた。

午後1時半頃には保護課の井藤徹参事も現地入りし、垂直の掘削面から片側の鐸身が露呈した銅鐸の出土状態を視察したあと、極めて不安定な状態にある銅鐸を当日中に取り上げる事を確認した。また当日中の報道関係への公開も決定され、現場での対応は府レベルで調整を行い、銅鐸の保存要領は奈良国立文化財研究所(埋蔵文化財センター研究指導部、村上隆氏担当)の指導を仰ぎ、取り上げ後は安全を期して一時に大阪府立弥生文化博物館で保管する等の事務連絡を受けた。

銅鐸出土の情報により同日午後4時の報道関係の取材解禁を待たずして、午後2時以降には保護課職員ほか関係諸団体からの見学者が続々と詰め掛けた。午後4時までには銅鐸周辺部の精査を完了しなければならず、応援に駆け付けた旧協会(財団法人大阪府埋蔵文化財協会)職員の手を大いに煩わせた。報道関係の取材解禁時間と遅くなる頃には大勢の報道取材陣に取り囲まれ銅鐸周辺部は騒然とした状況になる。仲春の陽光は短く弱い。報道陣のライトとフラッシュが銅鐸を照らしだす。取材後も当日中の銅鐸取り上げに向けた調査は続き、嚴寒の暗闇の中を煌々と投光器の光が照らしだす。取り上げに際しては奈良国立文化財研究所の指導により、地中に埋没した片面の劣化遮延策として、銅鐸を周囲の土ごと取り上げ、銹化の進行を最小限に食い止めるためボリエチレンシートで厳重に梱包し、袋内部の空気を吸引することにより外気と遮断して完全に密封状態にした。午後10時過ぎの銅鐸取り上げを経て午後11時過ぎには現場での作業を終了している。どの職員も銅鐸の出土と取り上げに立ち会った興奮と緊張感から解き放たれた安堵の表情が見える。それに付けても業界人の貪欲さは頗もししい限りである。明けて11日には旧協会職員数名の協力を得て、銅鐸埋納坑の補足調査を実施している。